「世田谷山観音寺池中の夢違観音像」
法隆寺の夢違観音（８７㎝）を拡大模写したお姿で、年次法要の池前祭が執り行われる。

# 特攻会報

令和元年11月

第１２７号

公益財団法人　特攻隊戦没者慰霊顕彰会
編集人　金子敬志
発行人　石井光政
印刷所　島根印刷株式会社

目次

**第68回特攻平和観音年次法要**・・・・・・・・・・・・・・編集長　金子敬志　2
**慰霊祭等参加報告**
義烈健軍出撃74周年慰霊祭・・・・・・・・・・・・・評議員　倉形桃代　6
義烈沖縄慰霊祭・・・・・・・・・・・・・・・・・評議員　倉形桃代　7
「錨地蔵尊」　御霊祭・・・・・・・・・・・・・・・会員　倉形　寛
「地蔵尊碑」建立の経緯と初代会長・・・・・・・・・・評議員　髙松真希　12
錨地蔵尊奉賛会事務局長　大瀧成紀　14
第六回戦歿学徒慰霊祭・・・・・・・・・・・・・・・会員　衣笠陽雄
令和元年度市ヶ谷台慰霊祭・・・・・・・・・・・・・編集長　金子敬志　16
**追悼田中賢一先生**・・・・・・・・・・・・・・・・理事　水町博勝　19
**会員投稿**
平和祈念展望台第二艦隊追悼式・・・・・・・・・・・会員　衣笠陽雄　21
海上挺進第六戦隊及び基地第六大隊・・・・・・・・・会員　青木和子　22
海上挺進第六戦隊戦闘行動概要・・・・・・・・・・・元隊員　中溝二郎　25
海上挺進第七戦隊及び基地第七大隊・・・・・・・・・元群長　西野勝輔　28
敵中横断山中彷徨・・・・・・・・・・・・・・・・・元隊員　中溝二郎　40
連載　山ある記８・・・・・・・・・・・・・・・・・元軍医　守屋　正　43
**文芸欄　歌俳柳の広場**
短歌・俳句・川柳・・・・・・・・・・・・・・・・・会員　池田康博　52
**事務局からの報告等**・・・・・・・・・・・・・・・・・

# 第68回特攻平和観音年次法要

日　時　令和元年年９月23日（月）
　　秋分の日　14時～15時30分
場　所　世田谷山観音寺・特攻観音堂
参列者　ご遺族20名、ご来賓54名
　　会員等１４０名　合計２１４名
（この他にお布施を納められた方１４０名）

## 一　式次第

司　　会　　大穂　園井
梵鐘点打　３回　　倉形　寛
国歌斉唱　トランペット　　堀田　和夫
　　牟田　春雄
願文・宮司神儀（神仏習合）
　　世田谷山観音寺住職　　太田　恵淳
　　駒繋神社宮司　　澤田　浩治
祭文奏上　特攻隊戦没者慰霊顕彰会
　　理事長　藤田　幸生
挨　拶　　世田谷区長　保坂　展人
献　吟　　一誠流吟詠　吉野　一心
　　龍笛　安藤　一感
奉納献奏　甲飛喇叭隊
　　隊長　原　知崇
慰霊献歌　全員合唱
「同期の桜」「海ゆかば」
　　トランペット　堀田　和夫
　　牟田　春雄
献　吟　　吟　吉野　一心
　　笛　安藤　一感

海上挺進第１戦隊群長　江口　大治　作
昭和20年３月26日　沖縄座間味島で戦死
今日あるをかねて待つ身の若桜
玉と砕けて名をぞ惜まん

神風特攻隊第５大義隊　辻村　健一郎　作
昭和20年４月５日　沖縄南方で戦死
かえらじとかねて覚悟の若桜
御国の楯とわれは散り行く

玉串奉奠　顕彰会会長、ご遺族及び
　　ご来賓代表
焼　香　顕彰会会長、ご遺族及び
　　ご来賓代表
　　その後　参列者全員
式衆退堂
池前祭　住職読経及び宮司による
　　祭詞奏上
式衆退場
直　会　15時30分～16時30分

## 二　概要

令和元年最初の年次法要、第68回特攻平和観音年次法要が９月23日（月）秋分の日、世田谷山観音寺特攻観音堂において催行された。

台風の接近による悪天候が懸念されたが、幸い、進路が離れたためか天候の悪化はなかった。

定刻の10時30分までには特攻隊戦没者慰霊顕彰会会員を主体とした支援要員が集合し、各部長の指示を受けた後、一斉に準備作業を開始した。雨の心配はなかったものの、日本海にある台風に吹き込む南風による蒸し暑さの中、各支援員は額

に汗しながらも着実に作業を実施し、11時過ぎには準備を完成させた。その後、支援要員は休息をとりながら昼食を取り、12時30分には所定の位置に着いて、来場者の受付、案内等を開始した。

法要は、回を重ねてしっかりと定着した神仏習合で行われた。

今年の仏教側のご奉仕は、昨年までの太田賢照山主からご子息の太田恵淳住職にバトンタッチされ、太田賢照山主は介添えとして恵淳住職に付き添っておられた。山主はお元気であるが、今後も年次法要が滞りなく継続するよう配慮されたものと拝察した。

太田恵淳住職を先頭に式衆入場

開始時刻が近づき、世田谷山観音寺住職及び駒繋神社宮司のお二方が特攻観音堂内の所定の位置に着席され、開始を待つのみとなった。

定刻の14時、鐘楼の梵鐘が３回点打されて法要が開始された。

式次第に従い、全員起立し、堀田、牟田両氏のトランペット演奏に合わせて国歌斉唱、続いて堂内に於て、世田谷山観音寺住職太田恵淳和尚の願文、駒繋神社澤田浩治宮司による神事が行われた。

藤田幸生理事長による祭文奏上

この後、堂前に於て当顕彰会の藤田幸生理事長による祭文奏上、保坂展人世田谷区長によるご挨拶と続き、法要は済々と執り行われていった。

定刻の15時30分に法要が終了し、その後、直会となった。

初めに当顕彰会の岩﨑茂副理事長の発声により御英霊への献杯を行なった後、直会が始まった。各テントでは和気あいあいの内に話が弾んでいたが、定刻となったので、再会を約して第68回特攻平和観音年次法要は散会となった。

保坂展人世田谷区長によるご挨拶

## 第68回特攻平和観音年次法要祭文

今年も、平和平穏の内に、この慰霊祭を執り行うことが出来ますことに、感謝申し上げます。　本日は、令和の時代、第一回目の世田谷山観音寺における年次法要であります。

時代は、大きく変化してきております。近年、宇宙、サイバースペースへと、広がってきております。生きるため、機械化、自動化、無人化、コンピューター化等が、飛躍的に進んでまいりました。

依存するエネルギーも、地球温暖化対策から、化石燃料を、原子力、風力、太陽光等に、広げてきております。

このように、皆様方が、夢見たこの世界は、「外面上」は、科学が飛躍的に、進歩、発達して、便利になりました。そうして、新しい国際法の制定等による秩序の構築、維持が、希求される時代となってきております。

しかしながら、一方で、人としての「内面上」の進歩はどうかと観てみますと、新しい分野での立法機運も十分では無く、総じて、近年の状況は、忸たるものがあります。

私達は、過去、数多くの大きな惨禍を繰り返し、その度に、新しい法等の国際規範を定め、秩序を確立し、争いを避ける努力をしてきました。先の大戦後においても、国際連合等の創設、活動により、安定期を迎えていました。

ところが、最近、再び、逆方向への風潮が高まってきているように窺えるのです。　国家間の融和や調和、思い遣りよりも、利己的な分裂、我が儘が目立ってきているように思えるのです。

このように、私達が生きていく世界は、物理的には、発展しているように見えますが、その一方で、人類の精神面の進歩は、遅滞を繰り返しているように見えて、仕方がありません。

私達は、常に皆様方から、「日本は今、良い国ですか？」と、問われているように感じております。その問いに、胸を張って「はい！」と、応えられ得るために、皆様方から受け継いだ、この人の世を、もっと精神面で、充実発展させていかなければならないと、思っております。

これからの二十一世紀、皆様方が、夢に描かれていた、より良い世界の実現をめざし、努力していかなければなりません。ここに、私達は、そこに向かって努力することを、お誓い申し上げて、祭文といたします。

どうか、安らかに、お眠りください。

令和元年九月二十三日

（公財）特攻隊戦没者慰霊顕彰会

理事長　　藤田幸生

## 区長ご挨拶

世田谷区長の保坂展人です。第六十八回特攻平和観音年次法要にあたり、一言ご挨拶を申し上げます。

昭和、平成から令和へと、先の大戦から七十四年の時を刻み、今年、六十八回目の法要をお迎えいたしました。

日本古来の国書である万葉集から「令和」を考案したとされる国文学者の中西進さんは、「気品のある端正な美、これが私の『令』の語感です。麗しいという日本語に最も近いでしょう。これに『和』を組み合わせることで、麗しく平和に生きる時代を築いていこうという切なる願いが込められています。」と語っています。

来年は、戦後二度目のオリンピック、『東京２０２０大会』が開催され、この世田谷の地でも昭和三十九年・１９６４年に続き、馬事公苑にて馬術競技大会の準備が進んでいます。そして、アメリカ選手団のベースキャンプも設営されます。

二十一世紀の現代では、ＩＴ・人口頭脳やネットワーク技術など飛躍的に科学技術が進み、会場準備のための大幅な都市開発があちらこちらで進められ、時代は大きく様変わりしようとしています。

しかし、変わらないものがあります。平和の大切さと、命の尊さです。七十年余り前、先の大戦で戦禍激しい絶望的な

戦況の中で、平和な世を願い、そして、ご家族や親しい方を想いつつ、大空に散っていった特攻隊員に思いをめぐらす時、胸がいっぱいになります。

戦後、時を重ね、ご遺族や関係者の皆様方が、戦争の記憶を後世に継承していくことがますます難しくなってきました。青雲の志半ばにて壮絶な最後を遂げた若者たちを、こうして広く人々の記憶に刻み、繰り返し語り継ぐことが、今を生きる私たちの責任です。

昭和十八年十二月の学徒出陣により学業半ばで海軍に入隊し、昭和二十年四月に鹿児島より沖縄に向けて出撃した神風（しんぷう）特別攻撃隊の山下久夫さんの日記や短歌、ご家族へ送られてきた書簡をご遺族が２００６年にまとめ、遺稿集「わが命　空に果つるとも」を自費出版されました。

大学生で二十歳を迎えた若者が、学業半ばで軍隊に入り、海兵団での訓練、航空隊での日々、いよいよ確実に生涯を終えることを決定づけられる特攻隊員に選ばれ、遂には出撃する時までの心の軌跡が日記の中に綴られています。

入隊の三ヶ月後、昭和十九年二月二十七日に「家の方では一体どうしているであろうか。食事の時、何時も老いた又腰も曲がらんとする母、何時も思い出し、幼き弟に思いをはせる。故郷の人も安らかれ。」と記しています。

昭和十九年三月七日、「まる二ヶ月不信であった父上よりの家の葉書が来る。葉書を携えて、講堂に行く。帰って再読。ベッドに入ってから又一読す。父上の元気な葉書で、歓喜に堪へず。」

日々の訓練の合間に、ご家族を思い、父からの葉書に心躍る様子が目に浮かぶようです。また、このような短歌を詠んでおられます。

『離るとも　思はばいつか　会へるかな
懐かしの父母　懐かしの弟』

そして、昭和二十年三月三十一日に参謀から、特攻隊への編入を告げられた日には、「永遠なるシリウス、リーゲルの星を見、静かな夜の帳（とばり）の中より、静けさを破る噴水の音を聞く。永遠と瞬間が如実に示されたとき、我々は恐怖と言い知れぬ感情がわく。」

運命の歯車が出撃に向けてまわり始めた時の心境を書いています。

その後の四月十三日の日記です。「唯（ただ）ふる里の皆様のご健康を祈るのみ。今日の十二時発進してゆく。今晩突っ込むか、又明日か。」

『先がけて　えみしの艦（ふね）に当らむと　思ふ心は　何ぞ静けし』

「父上母上　私のために泣かれるな。色々と有難うございました。兄弟よさらば、俺は征（ゆ）く。後を守って幸福になれ。」と結んでいます。

この日記から、二週間余の四月二十八日、鹿児島県の基地から出撃し、還ることはありませんでした。

特攻隊員としての強い使命感の一方で、家族への思い、不安と恐怖に対しても心静かに向き合い、時を過ごした心象風景を語る言葉、一言ひとことが私たちの心に染み入ります。また、ご遺族・関係者の皆様の歩み続けた、道程（みちのり）の重さに身が引き締まります。

私たちは、尊い犠牲となられた方々の前で、改めて「令和」の時代を営々と歩むことを誓います。国際環境は不安定要素を大きくし、世界中に紛争は絶えません。また、気象異変が大規模な自然災害を招く時代に入っています。

ここに平和の大切さと価値を改めて噛み締め、次世代に歴史の証言を確実に渡していく伝承の場として、世田谷区は、世田谷公園の中に平和資料館をささやかながら運営しています。

本日、ご参集の皆様のご健勝をお祈りいたしまして、世田谷区長の挨拶とします。

令和元年九月二十三日

世田谷区長　保坂　展人

# 義烈健軍出撃74周年慰霊祭

評議員　倉形桃代

平成31年5月25日、初夏の晴天のもと、陸上自衛隊健軍駐屯地（熊本市内）「義烈空挺隊慰霊碑」前において、全日本空挺同志会熊本県支部（支部長・松尾辰蔵氏）主催の「義烈空挺隊健軍出撃74周年慰霊祭」が行われ、今年も有志として参列した。慰霊祭は、健軍駐屯地司令・小瀬幹雄陸将補、第一空挺団・三塚克也副団長はじめ、空挺団からの参列者・全日本空挺同志会熊本県支部・熊本偕行会、関係者約１００名が参列した。

午前10時、慰霊祭は白い落下傘に覆われ、美しい供花に囲まれた慰霊碑前で、２名の空挺予備員による献灯から始まった。国歌斉唱、黙祷、熊本偕行会会長・中垣秀夫氏による慰霊の詞、香雲堂吟詠会による献詠、義烈空挺隊隊長・奥山道郎大尉と陸軍幼年学校・士官学校の同期（53期）でいらっしゃる熊本偕行会名誉会長・牧勝美氏をはじめ、参列者全員による献花、西部方面音楽隊の吹奏に合わせて「空の神兵」を合唱、献灯の消灯、松尾支部長の挨拶で慰霊祭は閉式となった。

今年も一般参列者代表として、中垣偕行会会長が「慰霊の詞」を奉読された。

慰霊碑前に設けられた祭壇

「空挺作戦は戦略目的に使用され、長大な距離を迅速な空中機動により地形・障害及び敵の抵抗を回避し、奇襲の可能性を増大できる。その主眼は、地上戦では即応できない緊急かつ緊要な時期に部隊を空中機動させ、重要目標の攻撃、要点の占領、危機正面への増援等を行い、作戦全般の遂行を容易にするにある。恐らく空挺運用の基本は当時と変わりがないと思う。つまり特攻作戦が最初から帰還することを前提としていない『必死の作戦』であるのに比べ、空挺作戦は地上軍と提携して生還することを前提としている。しかし敵中又は敵後方に降下し、困難な状況下で作戦を遂行するので決死の覚悟が求められることに変わりない。

義烈空挺隊員として、持てる力を出し尽くし散華された。英霊の崇高な勇姿を永く後世に伝えることは我々の使命。現在の日本の平和と繁栄が英霊の尊い犠牲の上にあることを想い、改めて感謝と崇敬を表す。また現在に至るまで、義烈空挺隊慰霊碑とその一帯を健軍駐屯地所在部隊が交代で保守・清掃をしてくれている。駐屯地の隊員各位にも感謝致します。」

（一部抜粋・纏め／倉形）

慰霊祭の前日、阿蘇熊本空港で空挺団ご一行と合流、熊本県支部の高見清十事務局長のご案内で、義烈空挺隊ゆかりの地と陸上自衛隊北熊本駐屯地にある広報資料館「北熊館（ほくゆうかん）」の研修に同行させて頂いた。昨年オープンした「北熊館」の真新しい館内には、熊本の中世から近代に到る歴史を順次学べるように資料が展示されている。当日は、高校生も研修に来ていた。

展示で特に印象に残ったのは所在部隊の紹介コーナーで、災害派遣で行った先で支援を受けた方々から贈られた「あり

「ありがとう」のメッセージ

がとう」のメッセージや写真が展示されていた事である。困難な状況にあった被災者の方々から、入浴や食事の支援に奔走された隊員の方々への感謝と労い、そして「大きくなったら自衛隊に入って、みんなの役に立ちたいです」という頼もしい言葉もあり、派遣部隊の方々のご苦労も報われたのではと感じ、嬉しく誇らしい気持になった。

その後、マイクロバスでの移動中、当時飛行場の滑走路だった場所や、義烈空挺隊員が出撃前に故郷遥拝をされた場所（今は住宅が建ち、面影はない）を見学、義烈空挺隊員の慰霊の為に建てられた普賢菩薩が祀られている「観音湯」に参拝してから健軍駐屯地へ向かった。今回は観音湯の〝お母さん〟堤幸子さんがお留守でお目にかかれなかった事を残念に思う。

最後に訪れた健軍駐屯地では、翌日の慰霊祭の準備作業が進んでいた。毎回、会場作りから当日の案内までお世話下さる隊員の皆様に、心から感謝している。

宿に向かう途中、昨年と同じ加藤神社境内から熊本城の修復状況を眺めた。天守閣の屋根には鯱が上がり、だいぶ進んでいるように見えたが、周辺の石垣や街中の様子から、復興はまだ途上であると感じた。慰霊祭後に行った阿蘇神社も、地震で倒壊した楼門や拝殿がすっかり取り払われ、修復工事が進められている。立派だった楼門は、令和５年度に完成予定との事なので、修復が叶った際には、是非また参拝したいと思っている。

## 「義烈沖縄慰霊祭」

評議員　倉形桃代
会　員　倉形　寛

令和元年６月８日、義烈空挺隊玉砕の地・沖縄の読谷飛行場跡における慰霊碑献花式、摩文仁の丘平和祈念公園内「義烈」碑前における慰霊祭が、全日本空挺同志会沖縄県支部（支部長・桃原浩太郎氏）主催で行われた。梅雨空からは、時折ポツポツと雨がパラついた。今年は当顕彰会の代表として、石井光政専務理事・倉形寛会員と共に参列した。全日本空挺同志会会長・直海康寛氏、第一空挺団三塚副団長、空挺団代表の方々、沖縄県支部の方々、昨年に引き続き、航空自衛隊那覇救難隊の有志、陸上自衛隊奄美駐屯地に新編された瀬戸内分屯地からも古場太佑司令等、約50名が参列した。

当日の朝、時折雨がぱらつく中、義烈空挺隊玉砕の現場である読谷飛行場跡の木碑前にて献花式が行われ、沖縄県支部・濱田種夫事務局長より木碑建立から現在に到るまでの経緯について説明があった。

読谷飛行場跡の木碑への献花式

その後、摩文仁の丘平和祈念公園内の「義烈」碑前に移動して、慰霊祭が斎行された。国歌斉唱、黙祷の後、沖宮（おきのぐう）の北西博由紀宮司による修祓、御霊鎮めの儀、献饌、祝詞、その後、桃原支部長の「祭主祭文」、直海会長・三塚副団長による「追悼の辞」、空挺同志会顧問・田中賢一氏の追悼文が、濱田事務局長の代読で紹介された。心を一つにして「空の神兵」を合唱、全員による玉串奉奠・撤饌・御霊送りの儀と、祭式は滞りなく終了した。

摩文仁の丘平和祈念公園内の「義烈」碑

玉砕の地・読谷の木碑は、事情があり現在の場所に移動されたが、全日本空挺同志会沖縄県支部・ご遺族・戦友の方々によって、今日まで大切に守られ慰霊祭が続けられてきた。慰霊碑は「神籬（ひもろぎ）」であり、魂は常にそこに居られるのではなく、ゆかりある方々が集い追悼する時に降りて来られ、後輩やご遺族・参拝者の祈りを受けとめる場所のように思う。時代が変わり価値観が変わっても、私達は「先人の方々がずっと守って来られたお気持ち」への敬意を忘れず、未来に継承していく姿勢が大切だと思う。

頼もしい空挺隊員の皆様のお姿に、英霊の面影が重なる。変わりゆく世界情勢の中で、多様化する任務に邁進されている隊員の皆様に、更なるご加護を頂けますようにと、英霊の御前で心から祈願したひとときであった。（倉形桃代記）

**令和元年度義烈空挺隊慰霊祭に参列して**

義烈空挺隊慰霊祭が６月８日に沖縄・読谷と摩文仁において行われた。当日は石井専務理事と倉形評議員と共に参列した。読谷は義烈空挺隊が特殊作戦を行った陸軍の北飛行場の跡地であり、また摩文仁は糸満の平和祈念公園内にある摩文仁の丘である。今日、ここ摩文仁は敵味方関係なく、沖縄戦で斃れたすべての軍官民戦没者の御霊を慰霊・追悼する根本の場であると言われている。

読谷には「義烈空挺隊玉砕之地」の碑、摩文仁には「義烈」の碑（奥山指揮官の絶筆を刻み込んだものである）がそれぞれ在り、慰霊祭はその碑前において実施された。なお「義烈空挺隊玉砕之地」の碑は平成22年頃までは別の場所にあった。現在読谷村役場前にある読谷中学校グラウンドのサッカーゴール付近にである。そのときまでは役場前は広々としたサトウキビ畑であり、その端にぽつんと立っていたのである。此処こそが義烈空挺隊が奮戦し斃れた正確な、元々の位置であった。筆者が初めてこの碑に拝礼した時はまだこのオリジナルの場所に立っていた。以前からこの慰霊祭には毎回参列してい

元々の位置の碑

るが、実施される日が義烈空挺隊将兵の散華された時期に合わせるため、どうしても沖縄の雨期中となり、このため天候は曇りか小雨、または雨である。沖縄の雨は内地と違い、雨粒が大きいので小雨であっても結構な降りに感じる。ただし、筆者はこれまで何回も当該慰霊祭に参列しているが、実に不思議なことに雨であっても慰霊祭の時間になると必ず一時雨が止むか、ほんの小雨となる。今回は当日朝の予報では雨であったが実際は曇りであった。本当に不思議である。

沖縄における両慰霊祭は、空挺同志会沖縄県支部が主催しており、参列者も基本的に同同志会沖縄県支部所属会員、陸上自衛隊第１空挺団隊員、第15旅団隊員、航空自衛隊那覇救難隊隊員、縁者の方々だけであるため、とてもこぢんまりとしている。また式内容も国歌斉唱、「空の神兵」及び「海ゆかば」斉唱、空挺同志会沖縄県支部長、第１空挺団副団長からの祭文、そして読谷は焼香と献花、摩文仁は玉串奉奠（那覇・沖宮の神官が来られるため）くらいで実に簡素である。が、しかし空挺同志会の方々、第１空挺団隊員、第15旅団隊員、那覇救難隊隊員という、戦没将兵の方々から見れば「正しい後継者」或いは「後輩」である自衛官が部隊として参列しているため、厳粛で清々とした雰囲気であり、とても感動する。また年度により陸上自衛隊第８師団の音楽隊が演奏支援に参加することもある。

さて、義烈空挺隊については古今様々な書籍が出版されている。どの書籍も義烈空挺隊を、いわゆる「特攻隊」として表している。すなわち体当たりやら玉砕やらの範疇に属するものとして理解されている。無論それはそれで良いのであるが、筆者は現役時代米空軍と航空自衛隊の優秀な中堅下士官の相互部隊研修プログラム担当であった時期があり、そのため在日米空軍基地に何度も出張した。もちろん嘉手納空軍基地も出張で頻繁に訪れた。嘉手納基地に行った際は、第18航空団先任下士官、嘉手納ＮＣＯアカデミー（上級下士官養成学校で、太平洋区域には、アラスカ、グアム、嘉手納の３校しかない）学校長、そして筆者のＰＯＣであった下士官と担当業務調整上の話以外にもいろいろとよく語り合った。お互いの国の歴史や地理、習慣をはじめ、特に戦史については個々の知識を交換すべく熱く語り合ったものである。真珠湾、硫黄島、日本本土空襲、そして沖縄・・・。そこで出たのが「義烈空挺隊」。その評価は極めて高い。特攻、カミカゼ、自爆・・・違うのである。彼ら米軍人の認識は、「義烈空挺隊とは、よく訓練された勇猛果敢な特殊作戦任務部隊・コマンドー」なのである。

「コマンドー」とは、書物や映画、あるいはニュース等で「コマンド部隊」という文言を読んだり観たり聞いたりしたことがあると思うが、それである。

19世紀末に南アフリカでボーア戦争が勃発した。これは南アフリカの植民地化をめぐってイギリスとオランダ系アフリカ人（ボーア人）が戦った戦争である。このときイギリス軍に多大の損害を与え悩ませたのが、ボーア人の騎馬兵である。民兵であり、軍隊の様に決まった編成・統制もなく、少人数で小銃によるヒット・エンド・ラン戦法での遊撃戦（ゲリラ戦）を繰り広げた。このボーア人の遊撃隊を「コマンドー」と言う。

１９３９年６月、第２次世界大戦初頭にイギリス欧州派遣軍約30万人以上がフランスの海岸から英本土への撤退・脱出に奇跡的に成功した。あまりにも有名な「ダンケルク撤退作戦」である。ところが成功とは言うものの、イギリス軍は様々な装備や武器、弾薬を全部フランスに置き去りにしたのである。

このため、直ぐにドイツに反撃しよう

にも武器弾薬が無ければ何もできない状態であった。しかし、少人数で特によく訓練を施し、任務遂行のための特殊能力や技能を有して指揮・統制を受けることもなく奇襲・遊撃戦により敵を攻撃・攪乱する特殊任務部隊が考案され、直ちに創設することが決定され実戦に投入された。これが現在われわれの認識しているコマンドー、すなわち「コマンド部隊」の始まりである。若かりし頃ボーア戦争に従軍していた英首相チャーチルがこの特殊部隊に「コマンドー」と名付けたのである。

こうして「コマンド部隊」の祖、イギリス軍は数々の歴史に残る作戦を実施した。最も有名なのが当時ノルウェーにあったドイツの重水（原爆製造に必要）工場破壊である。アメリカ、ドイツ、イタリア、日本も、この「コマンド部隊（特殊部隊）」の重要性及び必要性を認識し、それぞれに研究を開始した。終戦までにこれらの国は各々特殊部隊を創設し、実戦に投入した。当時はどこの国のコマンド部隊であっても部隊の性格上、その作戦は機密扱いであった。しかし現在に生きる我々はその作戦や戦いぶりを調査し、知ることができる。戦史に残る有名な作戦を行ったのがイギリス、アメリカ、そして日本である。

このように戦史或いは個々の作戦の戦闘詳報からも米軍はコマンドーの概念をよく認識しているからこそ、義烈空挺隊を、我々が通常認識している特攻隊ではなく勇猛果敢なコマンド部隊と理解し、沖縄戦におけるその戦いぶり・勇敢さを称賛し、そして義烈空挺隊の作戦は成功であった言い切るのである。

かつて敵であった国の軍人からも称賛されることで戦没英霊もきっと喜ばれているものと信ずる。

義烈空挺隊の作戦、すなわち「義号作戦」は当時の日本軍には珍しい陸海軍統合作戦の一つであったと言えよう。主力は空挺隊を送り出す陸軍航空の第６航空軍、支援援護は海軍の第５航空艦隊である。５航艦（宇垣提督）は、あの時点ではとても貴重な戦力であった数十機の一式陸攻や銀河、夜間戦闘機まで出したのである。義烈空挺隊による攻撃を少しでも容易にするためである。

特に陸軍は損害を出しつつも、北（読谷）飛行場および中（嘉手納）飛行場を重爆撃機によって数日間にわたり効果的な爆撃を実施した。義烈空挺隊の出撃直前には同じ健軍飛行場から第60戦隊の四式重爆（高速・運動性も極めて良く高性能であった。新幹線０系のデザインは、四式重爆の機首周りをモデルにしている。）が出撃した。本戦隊は何度も北、中飛行場の爆撃任務についていたが、義烈出撃当日も未帰還機を出し、戦隊長が戦死しつつも善戦した。

特筆すべきは都城からの四式戦闘機、第１０１、１０２および１０３の３個戦隊である。これらの四式戦闘機は上級司令部第１００飛行団・秋山紋次郎大佐（本顕彰会・秋山評議員の大叔父上様）の命令により全機爆弾を懸吊（爆装）した。これにより北、中飛行場を昼間超低空かつ高速で爆撃し、その直後地上目標に対して機銃掃射によってかなりの損害を与えた。しかし米軍に大損害を与えはしたが、飛行団も３個戦隊のうち２個戦隊がほぼ全滅状態となった。

だが連日、超低空を高速で襲って来る四式戦を米軍は「テリブル・フランク（恐ろしいフランク（四式戦のニックネーム））」と呼んだのである。当時陸軍航空の用兵思想には「戦闘爆撃」という概念は無かった。戦闘爆撃は１９４３年頃イギリス空軍が考案し、直ちに開始したものである。これは戦闘機に爆弾を懸吊して敵目標を銃爆撃するものである。最初は既存戦闘機に爆弾を装着していたが、

その効果が分かり、間もなく戦闘爆撃専用の機体が続々と開発されたのである。すなわち戦闘爆撃機である。（戦後では米国のＦ－４ファントム、英国のトーネードがこれに該当する。）１９４４年頃からは米軍も採用するようになった。第１００飛行団・秋山紋次郎大佐は義号作戦において、この「戦闘爆撃」を沖縄の米地上軍に対して運用したのである。

しかも敵の制空圏下においてである！驚嘆に値すると言えよう。（秋山紋次郎大佐は戦後、航空自衛隊創成期においてその進展に尽力された。）

このように義烈空挺隊を考えるとき、その作戦の成功を期して陸海軍の航空部隊が数日前から昼夜にかけて大きな損害・犠牲を払いながらも支援援護にあたったという事実も決して忘れてはいけない。（摩文仁「義烈」の石碑の裏側、ちょうど海側にはすべての戦没航空従事者の慰霊碑「空華之塔」が在る。）

英首相Ｗ・チャーチルは沖縄戦について「軍事史上もっとも苛烈で、もっとも有名な戦い」と語っている。また英国の著名な戦史・軍事評論家のバリー・ピット氏の沖縄戦についての評論がとても共感を呼ぶ内容であるので紹介する。

「沖縄決戦は、第二次世界大戦を通じて最も激烈であり、また最も損害の多い戦いであった。沖縄を死守する日本軍としては、この戦いこそ米軍の日本本土上陸を撃退するための最後の抵抗戦であると、かたく信じていた。…沖縄戦に臨んだ米第10軍は、あらゆる面からみても米軍史上最強の軍隊とみられていた。が、沖縄南部で米軍は日本軍の強力な防衛線に直面した。・・・陸海空からの強力な支援のもとに３個師団が突撃したのだが、日本軍の第一線を突破することはできなかった。日本軍兵士の比類なき軍人魂は最高度に発揮されたのである。・・・日本軍の特攻精神を狂信的だといって非難することは簡単だが、この考え方はいささか独断的すぎるのではなかろうか。軍人としての義務を全うするため、勇敢に、おのが生命を捨ててかえりみない、尽忠至誠の発露でなくて、なんであろう。」

我々日本人よりも外国人のほうがずっと正しく理解・評価してくれていることに今更ながら驚く。前述の嘉手納空軍基地の先任下士官たちの義烈空挺隊に対する評価にしてもまったく同じである。

沖縄は、観光目的では絶対行けない島である。陸士42期、各方面軍参謀、軍参謀を歴任された加登川幸太郎氏が戦後に訪れた沖縄について「あの高地も、この丘も、踏む土がみな英霊の屍の上のようで、やりきれない気持ちであった。沖縄とはこうした土地である。」と記されている。筆者も現役時代から何度も沖縄に行っているが、全くそのとおりに感じる。まさしく沖縄島は巨大な納骨堂そのものだと思う。安易な気持ちでは絶対に行けない。そして沖縄を想うとき、絶対に忘れてはならないのは、わが日本軍将兵の孤立敢闘の戦いであり、さらにそれを完全にするには義烈空挺隊、陸海の特攻隊、そして島田県知事長官と沖縄県民の己が生命を懸けた、まさしく鬼神も哭く様な行動であろう。

本年度の義烈空挺隊慰霊祭に参列し、なお一層その想いを新たにした。今回この機会を与えて下さった顕彰会に対し心より深く感謝申し上げる。

また管理面等でいろいろと懇切にお世話いただいた摩文仁の新屋様、永田様、ブリー・ガーデン御一同様、空挺同志会沖縄県支部御一同、陸上自衛隊第１空挺団、第15旅団、航空自衛隊那覇救難隊に心から厚く御礼申し上げます。

沖縄の陸、海、空に散った全軍官民の方々の御霊よ、われわれは決してあなた方のことを忘れない。（倉形寛記）

# 令和元年度「憂国碑 錨地蔵尊 御霊祭」に参列して

評議員 髙松真希
会 員 衣笠陽雄

令和元年七月十五日(海の日)に催行された「令和元年度・錨地蔵尊 御霊祭」に衣笠前専務理事と共に参列させて頂いたので報告する。

御霊祭に参列するための交通手段には、マイカーもしくは鶴岡駅から湯殿山仙人沢行きのバスを利用する。直行便は七時半発九時十分到着の一日一本のみである。正に秘境の霊域である。

仙人沢霊場で「憂国碑 錨地蔵」の場所を確認し、開式までの間に片道約一キロメートルの湯殿山神社本宮まで足を運んだ。

時は五九二年、蘇我馬子に父である崇峻天皇を暗殺された蜂子皇子は己の身の危険を感じ、船で山形県まで逃げ、海岸に現れた八咫烏に導かれて出羽三山(月山・羽黒山・湯殿山)に向かい、信仰を創始したと伝えられているそうだ。なるほど、本宮までの道程は粛然たる空気が一面に流れていた。

御霊祭開式に先立ち、錨地蔵尊奉賛会大瀧事務局長に挨拶をさせて頂いた。準備・式の進行・直会の手配と全てをお一人でこなされていると伺った。今年の参列者は二十七名で、例年三十名前後という事なので人数に大きな変化は無いが、次期の担い手が今のところ居ないのが御霊祭存続の問題の様であった。

参列者が揃ったので定刻より早く十時十五分から御霊祭が開始された。祭りは、前段神式、後段海軍式の二部で構成され、全国でも珍しい方式であった。神事として修祓、降神、祝詞奏上、全員による玉串拝礼があり、儀式が終了した。

続いて主催者から回天と錨地蔵尊についての説明があった。山形県出身の回天の乗組員では、三名が散華されたそうだ。地元参列者から「山形で生まれた子は、両親に肩車をしてもらい子守唄代わりに山形のシンボルである出羽三山を眺めるから、回天で特攻された三人にとっても湯殿山は懐かしい山だった筈なんだよ。」と伺い胸が締めつけられた。

湯殿山神社大鳥居

憂国碑「錨地蔵尊」前における神事

ここで初参列者の紹介があり、十時五十分から海軍式御霊祭が実施された。サイドパイプにて開式後、ラッパ演奏に合わせて軍艦旗掲揚、国家斉唱、黙祷、回天追悼の歌を歌い、行者であられる神林会長の般若心経、全員による献花、献杯、献水と執り行われ、拝礼、閉式の辞の後に「別れ」のサイドパイプが鳴り響き、海軍式御霊祭も滞りなく終了した。

献水（太平洋と日本海で汲み上げた海水）

その後、記念撮影をしてから車に便乗し約一時間の移動をし、予定通り十三時から山裾の安野旅館にて直会が始められた。御霊祭に参列された方々との交流は意義深く、様々な話を伺い、瞬く間に時間は流れた。

霊山での慰霊に全力を注がれる地元の有志の方々の真心に触れ、末永くこの御霊祭が存続される事を強く願いつつ、出羽三山を後にした。（髙松真希記）

**参列所見**

●錨地蔵尊の仙人沢霊場設置の意義について

回天戦没者を祭る「錨地蔵尊」は、湯殿山大鳥居のすぐ横、仙人沢の、行者のみが建墓出来るという「行者の聖地」に設置されている。ここに錨地蔵尊を安置するには色々大変だったと祭りの合間に神林会長から説明があった。実際、行者の墓がずらりと並ぶ錨地蔵尊の場所に立つと、周囲とは異形の碑であり確かに違和感がないとは言えないが、周囲からの独特の「気」・圧迫感を感ずるのは私だけではないだろう。この様な場所に設置された慰霊碑は全国でも珍しいと思う。

碑の原画を自ら書かれ、それを自ら石に刻まれ「憂国碑　錨地蔵尊」を建立された初代会長高橋俊二氏（十三期甲種飛行予科練習生、特攻回天搭乗員）がその碑文の中で「・・・私達は三百十万と云われる戦没者の御霊が湯殿山の御神湯に清められ再び生まれ出、平和の御先導を御勤め下さるよう・・・」と記している。これは湯殿山が、新しい生命の誕生を表わす未来の山（母の胎内）と言われているに由来している。山形県中央に位置する出羽三山（羽黒山・月山・湯殿山の総称）には、千四百年もの歴史を有する出羽三山信仰・羽黒古修験道が現在も連綿と続いている。「修験道」とは、自然信仰に仏教や密教が混じり生まれた日本独特の山岳信仰と言われている。現神林会長も修験のお一人である。古来山は神そのものであり、神霊の宿る聖地、新たな生命を育む霊地と考えられてきたが、羽黒修験道では、出羽三山のうち、

・羽黒山は、現世の幸せを祈る山（現在）

・月山は、死後の安楽と往生を祈る山（過去）、

・湯殿山は生まれ変わりを祈る山（未来）

と見立て、山伏姿で山を駆け巡り、難行苦行を行う厳しい修行（「三関三渡」や「擬似再生」の行）により、生きながら新たな魂として生まれ代わる事ができ

る様になるという。

高橋俊二氏は、生まれ代わりの出来るこの地に碑を建てて回天戦没者が再び故郷に新たな生を得られることを願ったものと考えられるがどうだろうか？　通常慰霊碑の場所は、建立・参拝の容易性・継続性等種々検討されるであろうが、前述の様な生きて帰って来るという様な思想・信仰から選ばれたという碑は余りないので驚きでもあった。　また同様な回天戦没者慰霊碑がかつて月山山頂に建立された。昭和五十四年「神潮特別攻撃隊菊水隊英霊位慰霊塔」が設置され、毎年鎮魂祭が実施されていたが「満願成就」となり現在は慰霊祭は実施されていないという。如何なる成果が「満願成就」なのかは私には不明であるが、関係者の高齢化、減少により祭りの斎行が困難・不可能が原因であれば「関係者」に囚われない「後継者」の育成努力をすべきであろう。さもなくば全国の同種慰霊祭は将来無くなる懼れもなしとしないであろう。高橋会長が、仙人沢という千四百年信仰が定着・継続している場所に錨地蔵尊を建立されたのは遠い将来を見越しての深謀遠慮があったのではないかと推察している次第である。

（衣笠陽雄記）

## 「錨地蔵尊碑」建立の経緯と初代会長
### 憂国碑「錨地蔵尊」奉賛会事務局長
大瀧　成紀

山形県回天会、所謂、憂国碑錨地蔵尊奉賛会初代会長　故高橋俊二氏のことである。氏は第十三期甲種予科練習生として特攻回天の搭乗員となり、終戦時海軍上等飛行兵曹であった。昭和五十四年、全国的に有名な出羽三山の月山山頂に、氏も主たる発起人の一人として戦没者の鎮魂碑を建立。例年終戦記念日の八月十五日、旧海軍関係者等と共に登拝、正午を期し神官ご祈祷等鎮魂祭を行ってきたが、戦後五十年を満願とし、平成九年死霊の蘇る生の山である湯殿山、霊気漂う即身仏入定の地、仙人沢霊域に一山萬霊に守られる形で「憂国碑錨地蔵尊」を建立した。

氏は農業の傍ら、仲間の熱望により水彩画の美野里会を発足、同時に乞われて初代会長として同志と共に個展等開催、幅広い活動を実施し、後進の育成に尽力。氏は多くの水彩展で入選した。初代会長として例年の慰霊祭で、戦中派の「死生観」を漂わせておられた氏は、戦後一日たりとも戦陣に散った戦友への思いを忘れなかった。一回天搭乗員として、生還された高橋俊二会長は、最も多くの戦友が散華された第十三期甲種予科練習生の一人として、戦陣に散った仲間を思い、魂を鎮めて描いた日本画の原画を石に刻み、「憂国碑錨地蔵尊」を建立された。地元首長等はもとより、全国各地の海軍関係諸団体並びに個人として三百四十三名という多数の方々の善意に支えられてこの悲願を達成することができた。湯殿山一山萬霊供養祭に先駆けて平成九年十月十日午前十時、「憂国碑錨地蔵尊」の除幕祭が、清秋の青空の下、全国各地からのクラスの戦友、海軍関係者等の参列各位を含め、盛大に斎行された。除幕祭を「十月十日」にしたのは、母親の胎内にいた子が、十ケ月十日目に誕生するという特別の日で慰霊祭の日に相応しいという事に因んだものである。

水彩画家の地元の高名な方によると、氏の水彩画の特徴は、透明で明るく、温和そのもので見る人を易しく包んでくれ、人柄がしみ込んでくる、と言われている。

不肖私と高橋会長との初対面は除幕式の翌年、平成十年七月海の日、慰霊碑の御前であった。当時私は、旧海軍横須賀第二海兵団の有った横須賀の教育機関に

勤務していた。同敷地内には硫黄島慰霊碑、海軍予備学生の碑等々があり、毎年夏には硫黄島で玉砕されたご英霊と海軍予備学生として戦死されたご英霊の慰霊祭を同時に斎行、全国各地から硫黄島等から生還された戦友各位等が百余名参列された。私は教育機関の指揮官指示の下、実施要領等の責任者として、本慰霊祭の全般を陰から支援していた。そんな折、当時の地元隊友会会長から「会の行事で月山に登山し、下山後『錨地蔵尊慰霊碑』に参拝したいので参拝要領を教えて」と、依頼があり帰省することとなった。当日制服着用で司会進行し、会員各位は参拝を果たした。その折初めて高橋会長にお会いしたのである。爾来元潜水艦乗組員として現役時代から今日まで慰霊祭を主担当させて頂いている不思議な御縁を感じている。

暫く十月十日の慰霊祭は、錨地蔵尊奉賛会委員や旧海軍関係者等が主体で、七月の海の日は自衛隊各種団体関係者等が主体となって斎行していたが、その後、十月の慰霊祭参列旧海軍関係各位はご高齢の為戦友の元へと旅立つようになり、爾来七月海の日に一本化する事となり、現在に至っている。

錨地蔵尊奉賛会初代会長高橋俊二氏は、就任以来数年を経過した某年、十万人に一人という「筋肉萎縮症」という難病を得、逝去の五ケ月前頃から自宅に於いて難病の突然の症状で意識不明に陥ったり意識が回復したりとの症状を繰り返して家族を慌てさせていた。会長が難病を抱えたまま農業の傍ら趣味の水彩画に親しんでいたある年の夏、私は会長の地元公共施設に当時隣市の海兵出身の教育委員長から呼び出しを受け参上した。そこには会長とやはり海軍出身（特年兵）で隣町の助役を歴任された錨地蔵尊奉賛会委員諸氏が居られ、代表して教育委員長から「錨地蔵尊奉賛会の軍資金を管理している甲飛予科練十五期回天の元収入役の体調が勝れないので、軍資金を申し受け管理して貰えないか」と依頼された。その折高橋会長から各位の面前で、「あの世を二回観て来た。戦友仲間から未だ来るのは早い。しっかり後輩に申し送って来い」と、言われたとのお話をお伺いし、その場の雰囲気と旧海軍潜水艦乗組員から薫陶を受けた末席の者としてやはり期待に応えなければ、という使命感の様なものを感じ錨地蔵尊奉賛会事務局長をお引き受けする事となった。

高橋会長は、その後少し安堵されたのでしょうか、戦友の元へ旅立つ二、三時間前まで自宅で趣味の水彩画（花の絵）を描き、昼食後何時もの様にお昼寝をしたまま、地域社会の発展のため数多くの社会貢献活動をされ、激動の昭和戦中派の死生観で生きてこられた平成の御世、その八十歳の生涯の幕を閉じられた。出会いから慰霊祭等の度に、その生き方等から幾多のご薫陶を受けた者として、思うに、会長は旧海軍軍人として、現世から旅立つときは己の天命を果たされ、「男子の本懐」だった様に思い、元自衛官としてかく有りたいものだと痛感している次第である。

今日、慰霊祭は初代高橋会長から五代目の会長神林千祥氏（先代から月山山頂慰霊碑・錨地蔵尊慰霊碑等に最も縁深く、鎌倉時代から続く由緒ある家柄の羽黒修験）の下で七月海の日、参列各位等と共に慰霊祭を斎行している。

今も天界に於いて高橋俊二会長は、ご家族やご親族、そして錨地蔵尊等、氏と御交誼のあった全てにご加護を与えておられるのではないだろうか。（令和元年八月）

# 第六回戦歿学徒慰霊祭

編集長　金子　敬志

令和元年８月25日（日）広島護国神社で催行された「第六回戦歿学徒慰霊祭」に顕彰会を代表して参列させて頂いたので報告します。

## 一　慰霊祭

**・概要**

広島護国神社は原爆ドームの近くの広島城の本丸の敷地内にある。

お堀を渡って本丸の天守閣に向かう。広いお堀には多数の鯉が泳いでおり、これが広島城の別名「鯉城（りじょう）」の元になったと言う一説がある。天守閣の全容が見えるとその足元に広島護国神社の社殿が確認出来る。

慰霊祭は13時から本殿において執り行われた。参列者は、広島県遺族会、呉市連合遺族会等のご遺族、戦友、江田島にある海上自衛隊第一術科学校長丸澤伸二海将補をはじめとした陸・海自衛隊員、広島県議、呉市議、一般の方など約60名であった。

慰霊祭の式次第は次の通り

修祓
拝礼の儀
献撰
祝詞奏上
祭詞奏上
巫女舞奉納
「海ゆかば」斉唱
玉串奉奠
撤饌
祭主一拝
祭主ご挨拶

厳粛な雰囲気の中、慰霊祭は清々と斎行された。時間は約１時間であった。

**・所見**

本慰霊祭は今年で６回目になるが、顕彰会としては初めて参列させて頂いた。

慰霊祭が執り行われた本殿

主催の戦歿学徒慰霊実行委員会の会員はまだ少ないようで、委員長の久保慶子さん（大和ミュージアム学芸員）が忙しく立ち働いており、久保さんの熱意が慰霊祭を支えていると感じ、頭の下がる思いであった。

この後、社務所の会議室に場所を移して、学徒出陣され、第６筑波隊として特攻出撃された経験をお持ちになる柳井和臣氏の講演会がおこなわれた。

## 二　講演会

講演会は、第１部は柳井氏の軍歴等の紹介、第２部は亡き戦友吉田信大尉についての紹介である。

柳井氏は、97才とは思えないしっかりしたお話ぶりと背筋の伸びたお姿が印象的であった。

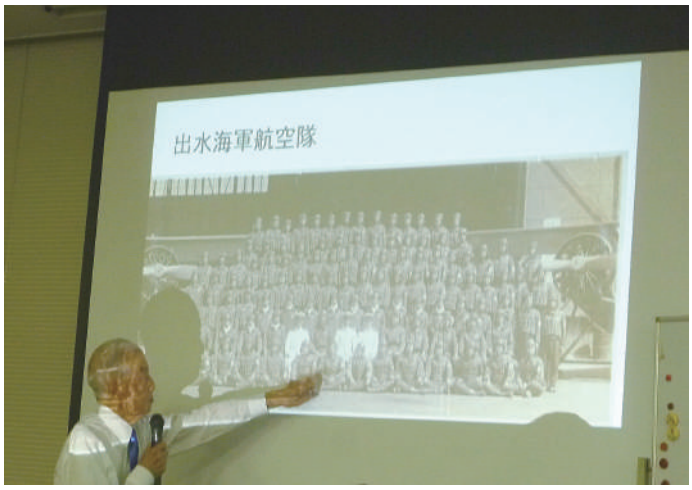
**第１部「柳井氏の軍歴」**

柳井氏は昭和18年10月、慶應義塾大学在学中に学徒出陣で海軍に入隊され、第14期飛行予備学生に選抜され、操縦士としての訓練を受けられた。

氏は「自分は大学の代表の一人として他大学の者には負けないとの気持ちで訓練に望んだ。１位か２位だった。」と今に通じるお気持ちの強さを語られた。

初めの訓練は鹿児島の出水海軍航空隊であった。出水海軍航空隊のお思い出としては、教官選抜チームと学生選抜チー

ムで野球試合を行ったが、学生側は６大学対抗の選手や職業野球（プロ野球）の選手がいたので教官チームに圧勝、それから教官は学生に対して一目を置くようになったと感じたそうである。



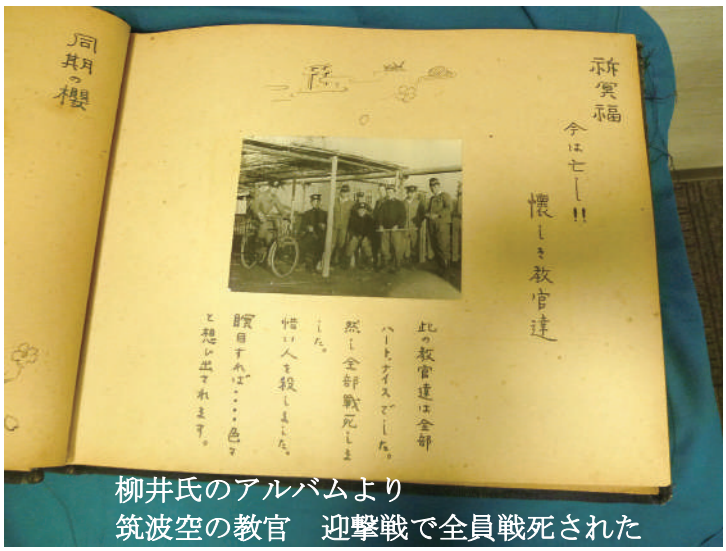

自分の位置を指さす柳井氏、成績が良かったので真ん中にいると笑いながら話された。

また、ある日、宇佐海軍航空隊から艦爆彗星が飛来、低空飛行を行ったが、帰る時背面飛行で通過、実用機の凄さを知った事と先輩が「早く部隊に来い。」と言っているように感じたと語られた。

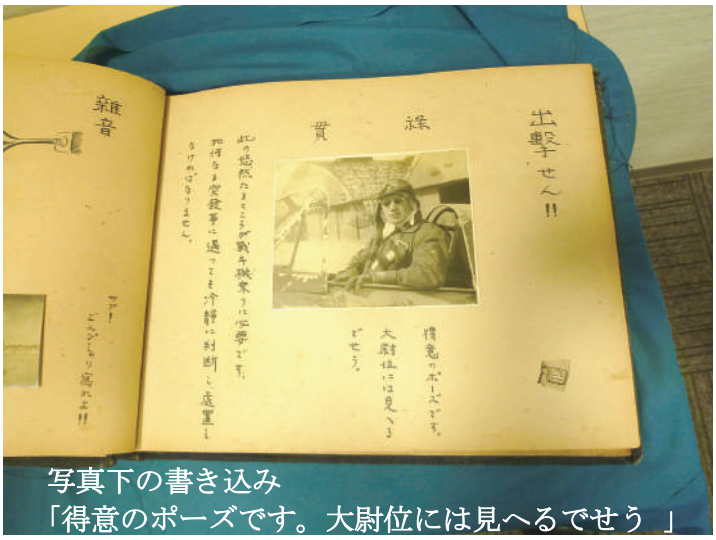
その後、筑波海軍航空隊で戦闘機の操縦訓練を受ける事になった。

在隊中に特攻隊に志願されたが、動機は、昭和20年２月16日米軍艦載機の空襲の迎撃に上がった教官９名が全機未帰還になったのを見て「教官でさえ敵わない。今の自分では特攻隊として戦うしかない。」と考えて決心されたとの事であった。

特攻出撃のため鹿屋基地に進出、第５筑波隊として出撃する予定であったが乗機が空襲により破損したのでこの時は出撃出来なかった。５月14日、乗機を得て第６筑波隊として出撃、高度百ｍで飛行し敵を探したが発見出来なかったので、覚悟を決めて鹿屋に帰投するが岡村司令から叱責される事はなかった。




柳井氏のアルバムより
筑波空の教官　迎撃戦で全員戦死された




写真下の書き込み
「得意のポーズです。大尉位には見へるでせう 」

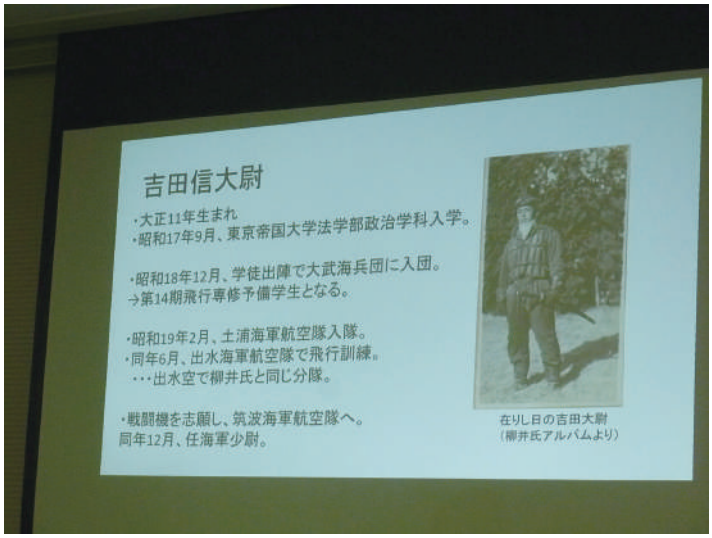
その後、命令により鹿屋から松山への零戦の空輸に従事、終戦後、岩国海軍航空隊に移動、８月20日、日本人としては恐らく初めての原爆投下後の広島上空の

飛行を経験。その後無期休暇となり復員された。

**第２部　吉田信大尉について**

吉田信（まこと）大尉は、東京帝大法学部政治学科在学中に学徒出陣、柳井氏と同じ14期飛行予備学生に選抜される。

筑波海軍航空隊で、柳井氏と同様に特攻志願、昭和20年５月11、第５筑波隊として鹿屋を出撃、南西諸島で戦死された戦死後、少尉から大尉に２階級特進。前述のように柳井氏も同時出撃の予定であったが、乗機破損のため同行出来なかった。




柳井氏はライバルとして吉田大尉を認めると共にその人間性を賞賛されていた。

柳井少尉（左）と吉田少尉（当時）

吉田大尉の手記が紹介された。手記は４月25日から５月11日の出撃直前までの間で、筑波空からの進出、情勢の変化により度々の出撃変更、その間における柳井氏や同期の方との交流などが書かれている。

スライドで手記の写真が示されたが、筆跡と文章からは出撃を前にしての動揺などは微塵にも感じられないもので、強い精神力を感じた。

以上で講演の題目は終わったが、最後に皆さんに言いたい事があるとして次の言葉を述べられた。

・知者は惑わず
・仁者は憂いず
・勇者は懼れず

知識のある人は物事に惑わされず、仁者、徳のある人は情勢が変わっても憂いず、勇気のある人は物事に怖れを抱かない。知、仁、勇は日本の男子が身につけるべきものだと考える。

これが一つ、もう一つは

Life is now feel it

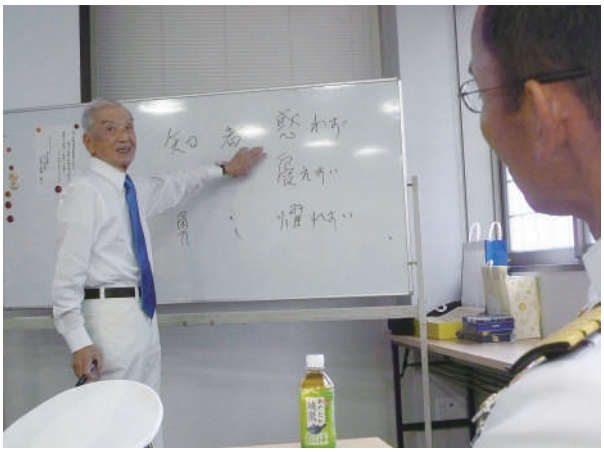
今が大事、それを実感しなさい

Always do the best　Always fun

常に全力投球。、そして楽しみなさい。

そうすれば人生に悔いはない。

と熱く語られて講演を締め括られた。


熱弁を振るわれる柳井氏

## 令和元年度市ヶ谷台慰霊祭

理事　水町博勝

令和元年九月十一日（火）市ヶ谷駐屯地（メモリアルゾーン）において市ヶ谷台慰霊祭が行われ、理事長代理で昨年に続き参加しました。

当日は第四次安倍内閣改造が行われました。防衛省では岩屋大臣から河野太郎大臣に交替されましたので、内局・統幕・陸海空三幕等主要幹部は離着任の準備の様子、昨年の出席者との違いが伺えた。

台風十五号が前々日の早朝千葉市付近を通過し、中心より右側に被害が甚大と報道されていた。参加者の中には水汲みで並び日焼けの方も、台風余波の湿度が高く残暑の下での開催でした。

### 一　慰霊祭の状況

参列者は宇都参議院議員、陸上幕僚監部九鬼監理部長、防衛省大臣官房末富広報課長はじめ、空幕石上総務部長の来賓、友好団体代表、阿南家・吉本家のご遺族、市ヶ谷台慰霊会、各地偕行会会長、偕行社出身別・陸士各期代表、偕行社役員等合計１６０名の参加でした。

・自衛隊殉職者慰霊碑前での開式に先立ち写真撮影

・十五時二十分　慰霊祭開始

・祭主挨拶（森勉偕行社理事長）

・国歌斉唱　黙祷

・祭文奏上（森勉理事長）

・奉唱（偕行合唱団）

「海行かば」全員合唱

・焼香（阿南大将茶昆之碑・杉山元帥・吉本大将自決之跡の碑前→全陸軍航空部隊・陸軍航空本部・陸軍航空総監部碑前→陸軍少佐晴気誠慰霊碑前）

・献花（自衛隊殉職者慰霊碑前）

・流れ解散

阿南大将茶昆之碑

### 二　所見

慰霊祭の会場メモリアルゾーンは何時もチリ一つなく参拝者を迎えてくれる。森理事長から昨年阿南大将のご子息がご逝去され、今年はお孫さんの阿南健太様が参列、と紹介され、慰霊を継承された。終戦を前に一身に責任を負った。陸軍大臣の辞世の句は「大君の深き恵に浴みし身は言い遺こすべき片言もなし」昭和天皇への畏敬の念をもたれ、遺書は「一死以て大罪を謝し奉る昭和二十年八月十四日夜陸軍大臣阿南惟幾　神州不滅を確信しつつ」と書かれた。天皇陛下も昭和、平成、令和と継いで、遺族も同じと感慨を覚えます。

今回は「全陸軍航空部隊碑」について細

全陸軍航空部隊碑

部にふれてみる。

全陸軍航空部隊、陸軍航空本部、陸軍航空総監部の三つの組織名碑文は菅原道大書(元陸軍中将・第六空軍司令官)達筆な正書です。

焼香では左側に由来を書かれた碑文は、通常読まずに過ぎてしまいます。

碑文「この碑は陸軍航空を育成管轄した陸軍航空本部陸軍航空総監部ならびに全陸軍航空部隊を後世に記念し、かつ終戦に際し責を負って自決された航空本部長寺本熊市中将を始め創始以来陸軍航空に在籍し、国の内外において戦没或は殉職された全英霊の偉勲を偲んで敬愛な追悼の誠を捧げもってわれら陸軍同人の心のふるさととしてその友誼を深め永遠に世界の平和と日本の空の安全を祈念するものである。」昭和五十二年三月十日

建立委員長　川嶋虎之助謹書

と碑の正面に書かれている。

寺本本部長の言「よくもよくも米国を相手にしたものだ。あちらは種を自動車でばら撒いただけで、ほっておいても穀物の出来る国だ。その上、石油はある、資源はある、第一次大戦以来、連合国数カ国の台所を賄ってきた国だ。国力を侮ったらいかん。しかし決まってしまった以上は天子様にお仕えするだけだ。」を米国駐在武官の体験を踏まえ残す。終戦の大詔拝聴後、天皇陛下と多くの戦死者にお詫びし、自室で割腹自決された。

川嶋氏は、元少将、元陸軍航空本部総務部長、上司の偉勲を碑文の中に残した。碑の関係者には特攻隊員、そのご遺族、戦友も当然含まれ、建設以来毎年四月、八重桜の下で慰霊祭が行われ、特攻慰霊顕彰会の陸軍関係者は必ず参加していた。

副碑主碑の後方左右に銅の円柱に鎮魂と書かれたものがある。

正面の碑はさることながら、この碑のある一区画の主眼は「鎮」「魂」の副碑にあると説明板があります。

副碑には二、一〇四の陸軍航空部隊名が刻まれている。「我々は嘗てここに刻まれているどれかの部隊に属し、また我が身近な戦友がその部隊で戦死したことを憶えば、数個の文字で表現されている部隊名に、限りない愛着を覚えるのである。そして我々がいなくなってもこの碑は厳然と残り、後世に何かを語りかけてくれるであろう。」と関係者(航空一家)の熱意と願望を記念誌に残しています。

旧軍の方は陸軍なき今、自分たちが残した慰霊碑を誰かが絶やさず守り続けてほしいとの願いがあったのでしょう。

戦後、自衛官ＯＢの中、特に航空は新軍種、旧軍の伝統を引き継いだ意識が少なく、新生であるとして、旧軍の慰霊継承に積極的でなかった面があったと思います。しかし旧軍の方が居ない現在は、自分達が継承しないで誰が継承するのか、との自覚の基、戦史等過去の事実を知り、敗戦の原因・失敗・反省・旧軍の方で語ろうとしなかったこともあり、国として貴重な教訓があることを忘れてはならない。それを伝え、今後の糧にするのは今の吾々である。と思う次第です。

初秋に、市ヶ谷台の慰霊祭によって、各慰霊碑をめぐり、先人の遺徳を思い、戦後の自衛隊殉職隊員特に同期の霊を忍ぶことができた。また市ヶ谷の陸上自衛官が、我々に精神誠意尽くされていることに感謝し、思いを新たにしました。

右の副碑「鎮」

左の副碑「魂」

## 追悼　田中賢一先生

会員　衣笠陽雄

田中賢一先生は、令和元年七月二日、一〇一歳という長寿で天寿を全うされ黄泉の国に旅立たれました。私は、若い頃から先生から多くの薫陶を受けてきましたので私なりの思い出から先生の遺徳を偲んでみたいと思います。先生の生涯は、一言でいえば「旧軍落下傘部隊戦没将兵の慰霊と顕彰に尽くされた」と言っても過言ではないと思います。

先生は、大正七年静岡県でご生誕、昭和十四年陸軍士官学校（第五十二期）を卒業され、昭和十六年秋、騎兵科将校として挺進練習部に志願され、同十二月には第一挺進司令部に補職され南方に出動、翌年八月挺進練習部本部に戻り教育訓練幕僚として勤務、昭和十九年十二月第一挺進戦車隊長に補職され終戦を迎えられました。先生が、騎兵科であったことで長く挺進団の司令部等勤務を歩まれた事は、その後の人生に少なからず影響があったと思われます。志願をして陸軍落下傘部隊に所属されたものの、当時の「騎兵」は軍馬から近代的な戦車への変換の初期であり、落下傘部隊は、航空と歩兵が主力でありました。近代的戦車の開発とそれを輸送する大型航空機（滑空機）は、実戦には間に合わず又戦況からも実現しませんでした。従って先生の騎兵将校としての主な活躍場所は、部隊より司令部勤務だったのです。もとより先生の本心は出撃部隊の一員として出撃し華々しい戦果を挙げる事を熱望されておられたと思いますが、終戦の最後まで戦車部隊としての実戦の出番はありませんでした。戦友たちの出撃を見送りながら切歯扼腕されておられたであろう事は想像に難くありません。これらの事が戦後、挺進団戦友の慰霊顕彰に尽すという原動力になったのではないかと思われます。直接出撃の機会はなかった代わりに、挺進団全般の状況は当然乍ら細部まで把握されておられましたし、第一線部隊の実情については、戦中のみならず戦後も生存帰還者も含め多くの情報資料を収集され、特に挺進団最後の作戦「義号作戦」は突入までの紆余曲折を大所高所から細部情報収集され分析されておられます。これらの資料は、戦後の落下傘部隊の再構築、慰霊顕彰活動に大きく寄与している所であり、我々の貴重な財産になって居ります。先生は、戦後、陸上自衛隊に空挺団が創設されるや志願され、初期の土台構築に当たり旧挺の伝統継承に尽力されました。御退官後は、偕行社を始め旧軍各種戦友会等で御活躍されました。空挺同志会では会長以下の要職を歴任され、特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会に於いては会報「特攻」の編集長として二十年に亘り特攻隊戦没者の慰霊顕彰に努められました。特に空挺特攻関係記事の執筆には情熱を注がれ旧落下傘部隊の精神伝統の継承に尽くされた功績は極めて大きいものがあります。

戦前の日本の落下傘部隊の創設当初から戦後の空挺団の育成まで一貫して落下傘部隊に係わりその育成と発展への寄与並びに伝統継承の中枢におられた事は我々後継者にとって何物にも代えがたい存在でありました。先生は、特攻隊に関する数多くの資料を残されておりますが、特に特攻隊員の心情の把握についての資料は今後我々が「特攻」を研究する上に欠かせないものと思っております。又先生は、詩歌部門でも卓越した才能を示され、自ら多くの追悼の詩歌を残されると共に、特攻隊員の遺書・詩歌等の発掘・紹介もされ、特攻隊員の心情把握に貴重な資となっております。

先生がホームに入居されてから何度かお訪ねしましたが、何時も眼光鋭く、精気溌剌とされたしっかりした態度で記憶も確かでとても百歳とは思えない程でした。旧挺の話になると止まらなくなりましたが、職員から「入居者を集めて落下

傘部隊の話をしておられますよ！」と聞いてその情熱が少しも失われていない事に感動した事もありました。先輩達は先生を「ガム賢」とあだ名されていましたが、今でも苦虫を噛んだ様な顔、突き刺す様な目で、語気鋭く説く先生のお姿が目から離れません。今後も先生の残された遺品を活用して特攻隊員の慰霊顕彰と共に自らの更なる研讃に励むことが先生に対する恩返しと思っております。今、先生は、かの国に於いて懐かしい戦友たちと再会をし、ひょっとしたら「戦況の更なる事実解明！」に努めておられる？かもしれません。今後も天上から引き続き我々に教唆を頂ければと思います。

先生の永遠の安寧をお祈り申し上げ追悼の言葉とさせて頂きます。

眼光鋭い田中賢一氏（ガム賢？）

## 平和祈念展望台 第二艦隊追悼式に参加して

会員　青木　和子

あと3週間ほどで平成が終わろうとしていた。大東亜戦争は「太平洋戦争」と表記を変えられ、まるで源平合戦の様な「お話」として教科書の数頁を使うだけだ。

「戦争を知らない子供たち」という歌があったが、当時の子供達は戦争を体験していないだけで戦争があったことは知っている。しかし今はその「お話」を学ぶまで戦争があったことすら知らない子供達もいるのだ。

平成31年4月7日（日）鹿児島県枕崎市火之神公園にある平和祈念展望台において、有志による第二艦隊追悼式が執り行われた。

この日は主催であるＮＰＯ法人平和祈念展望台奉賛会と㈱岩田組様が、会社をあげて記帳所やテント、献花台等を設営、参拝者用の花を用意して朝から展望台に詰めている。

慰霊追悼は10時～15時の間となっているが、一日を通し、大和沈没時間にあわせて来られる方が一番多いと聞き、13時30分頃現地入りした。

「青海のほとりに哭す　平和祈念展望台入口」と彫られた石柱を過ぎると、両側に石灯籠のならんだ坂道が緩やかなカーブを描いており、右手には毎年4月7日に必ず咲くと言われている第二艦隊司令長官であった伊藤中将ゆかりの父子桜がある。少し父子桜について触れておこう。庭いじりの好きだった伊藤中将の自宅には手植えの大きな桜がある。父に憧れていた長男は海軍に入隊、晴れて零戦搭乗

「戦艦大和などに捧ぐ殉難鎮魂の碑」

員となるものの、長官が戦艦大和と運命を共にした3週間後、長男も直掩隊として出撃し伊江島付近で散華した。その後、桜の根本から、父親に寄り添う息子のように小さな芽が吹き出す。戦争で散った親子の情愛に想いを馳せ、この桜を父子桜と呼ぶようになった。この桜はそれを分枝したものである

参道を上り設営された休憩所のテント前を通る。奥の受付で記帳をすると献花用の白い菊の花を渡してくれた。

展望台への階段を上ると、平和の女神像が目に飛び込んでくる。半旗が掲げられ、「戦艦大和などに捧ぐ殉難鎮魂の碑」の前には献花台が据えられ、すでにたくさんの花が手向けられていた。この展望台には数多くの記念碑や石板、また、第二艦隊だけでなく、前路掃討部隊の写真・解説等様々な資料が展示されている。

平和祈念展望台建設の趣旨は、「戦争という歴史上の出来事を語り継ぐことにより、子孫が悲劇を繰り返すことなく平和な生活を送ることを願い、かつ今日の平和に感謝する」というもので「戦艦大和ほか戦没者五十周年記念事業」の一環として枕崎商工会議所により着手され、全国からの支援のもと、平成7年に完成した。しかし完成より10年を待たず、平成15年には商工会議所による事業継続が困難となってしまう。まさに座礁やむなしと思われたこの時、事業の継続を申し出たのが、建設時に私財を投じていた岩田氏（父）だった。「国の為命惜しまず見事に散った勇士達の最期を想うとき、その御霊を永久に御供養するとともに、この歴史の事実を風化させることなく次世代へ伝承していかなければならない。」岩田氏（父）は多くの人の想いごとこの事業を引き受けた。

現在はまるで父子桜の様にご子息が後を継ぎ、平和祈念展望台奉賛会として毎年の追悼式と展望台の維持管理を続けられている。

展望台広場では献花を終えた参列者が、話をしたり碑文を読んだりしながら「その時」を待つ。14時5分、展望台広場に「黙祷」のアナウンスが入った。矢矧の沈没時間だ。各人海に向かい黙祷を捧げる。その後「海ゆかば」、三味線「さくら」、ラッパ「国の鎮め」と続き、14時23分大和沈没時間に再び黙祷となる。奉賛会の岩田理事長（子）がご挨拶をされ、最後にこの枕崎・火之神公園平和祈念展望台のイメージソング「千の蜻蛉」をシンガーソングライターの宮井紀行さんが歌って解散となった。

この歌は岩田理事長（子）が、ひとりでも多くの人にこの枕崎の地と戦争の歴史を伝えようと、東奔西走して完成させた歌で、誰でもＹｏｕ Ｔｕｂｅで視聴できる。

『千の蜻蛉』詞／曲　宮井紀行

寄せ返す波は語り打つ　海（わた）の中眠る友のことを
夕凪に微笑む　無垢な君の笑顔　明日知れぬ我が身の運命と知りて
群青の涙に染まりゆく　深き心の哀しみは
せめて君よ安かれと願い　永久に祈らん
春を告ぐ風が舞い戻す　年積もる我と若き友を
癒えぬ心に添う　静かな零れ桜　巡りゆく季節の哀しみ抱え
もう一度会いたいと願いを　叶えし友垣姿は
卯月の空高く飛び回る　千の蜻蛉
群青の涙に染まりゆく　深き心の哀しみは
せめて君よ安かれと願い　永久に祈らん
千の蜻蛉

宮井紀行氏

聞くところによると十数年前の慰霊祭で、どこからともなく空いっぱいにトンボの大群が現れたという不思議なことがあったらしい。この千の蜻蛉という題名はそこからとったようである。

旅の終わり、飛行機の窓からふと外を見ると、まるで直掩機のように雲の上を光の輪に包まれた小さな飛行機の影がついてきていた。何のことはない、ただのブロッケン現象なのだが、以前、沖縄慰霊の旅の帰りにも同じ現象に遭遇しており、その時は「本土に還るんだね、一緒に帰ろう」と思ったものだ。自然現象だとわかってはいるが今回もやはり不思議な気がした。

数日後Ｙｏｕ　Ｔｕｂｅで「千の蜻蛉」と検索する。

歌は

「１９４５年４月７日
枕崎の西南西約２００km沖、坊ノ岬沖海戦にて散華した
大日本帝国海軍第二艦隊乗組員３７２１柱の英霊に捧ぐ」
のテロップで始まり
「私たちは忘れてはいけない
この海の果てに　眠っている人たちの想いを」
と結んでいる。

画面いっぱいに群青の海と、展望台へ続く桜の坂道、そして美しく壮大な枕崎の自然が次から次へと映し出され、還らぬ者と遺された者の想いが、切ない歌詞とメロディーに乗って琴線に触れようとする。これからもこの歌は展望台から見た海を、はるか水平線が青い海と青い空を分けていたあの日の海や風までをも、何度でも私に思い出させるのだろう。

半月後、奉賛会より参拝の礼状が届いた。戦争のなかった平成が終わり、令和の時代も引き続き戦争のない平和な時代であるよう祈り努力してゆきたい。また、折ある毎に「千の蜻蛉」を披露し、多くの次世代の方々に史実を刻んでいただくことを願っている、と記されていた。素晴らしいことだと思う。

この歌は幾千万の想いと共に永遠に歌い継がれてゆくのだ。

桜の坂道からの眺め

## 海上挺進第六戦隊及び基地第六大隊

元隊員　中溝　二郎

海上挺進第六戦隊は、通称号暁（比島到着後は威）第一六七八二部隊と称し、戦隊長は、陸士五三期の日比野三郎大尉（二十年六月少佐となる）で、第一中隊長は伊藤公彦中尉（陸士五五期で十九年十二月大尉になる）、第二中隊長は岡本礼夫少尉（幹候九期）、第三中隊長は森照人少尉（陸士五七期）、戦隊本部付将校は杵築清治少尉（幹候八期）で、群長は豊橋第二予備士官学校出身幹候一〇期の見習士官（二十年一月少尉）、隊員は特幹一期生（十九年十一月伍長）であった。

戦隊は昭和十九年八月下旬から幸ノ浦基地で訓練に入っていたが、九月十五日に正式に編成となり、同日比島に向け相模川丸（戦隊本部・第三中隊乗船）及びハンブルグ丸（第一中隊・第二中隊乗船）で宇品を出港し、十月四日に台湾の高雄港に着いたが、折りから台湾近海に米機動艦隊接近の情報により、相模川丸乗船の隊員は高雄に上陸し（積載していた舟艇も揚陸）、輸送船ハンブルグ丸に乗船の隊員はそのまま香港に退避したが、香港で英軍機の空襲を受け特幹の一名が戦死した。

いわゆる台湾沖航空戦の終了した後、十一月一日ようやく戦隊全部が高雄に集結し、高雄港から戦隊長以下本部の一部は第一、第二中隊とともにハンブルグ丸に乗船して先発の船団となり、第三中隊と本部の一部は残留となって、後日ブラジル丸に乗船し比島に向かった。

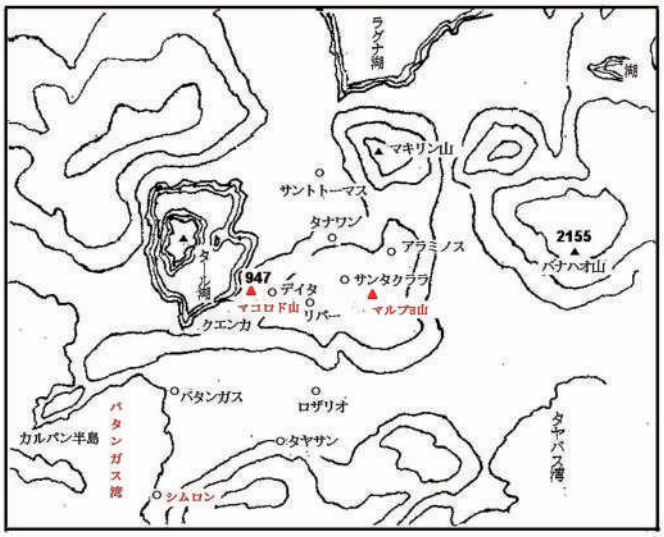
先発船団のハンブルグ丸は、十一月二日夜十一時、ルソン島の北端に近いサブタン島西方海面で、米潜水艦の魚雷攻撃を受け、魚雷二発が命中し、航行不能に陥ったため、翌日味方の海防艦の砲撃でこれを沈めた。この沈没によりこの船に積載してあった㋹舟艇の全部を失うことになった。

また乗船中の戦隊員は、八時間海を泳いだ後、翌三日朝海軍の艦艇に全員救助され、一時サブタン島に上陸させられた後、マニラに輸送され、十二日にマニラに到着した。

翌十三日マニラは米軍機の空襲を受け、戦隊員はマッキンレーに所在する第一四方面軍の司令部付近に退避したので、人員の被害はなかった。

十一月十八日、正式に第一四方面軍（比島方面軍）の指揮下に編入され、同月二十九日にルソン南部のバタンガス州中のバタンガス市南方九キロの地点にあるシムロン地区の舟艇秘匿海岸に秘密裡に移動を行ない、一と足先に到着していた第一〇六大隊（基地第六大隊）と合流した。ハンブルグ丸に積載していた舟艇は海没したが、二十隻の舟艇を先着の基地大隊が受領搬入していた。（何処で受領したかは不明、多分コレヒドール島に集結されていた舟艇の一部か？）

この地区は軍の措置により、基地設定に先立って、住民の強制移転を行なって



いたので、戦隊の企図の秘匿は可能であった。

なお戦隊は同地区に到着と同時に軍司令部から、漁撈第六大隊と呼ぶよう命令を受け、第二海上基地隊長（これも秘匿名として、第二漁撈長と呼んでいた）の堤中佐の指揮下に入ることになった。

二十年一月二十九日、米海軍輸送船団がミンドロ島北端海面より接近、上陸用舟艇がバタンガス湾に侵入してきた。同地を警備していた第一七連隊（藤兵団と称していた）第六中隊と空爆も交えて交戦となったが数度の着岸態勢を繰り返したのみで、そのまま撤退した。

この日戦隊長の命令により戦隊本部付将校の杵築少尉以下十二名が、舟艇十隻で出撃を図ったが、近海は波浪が高く舟艇の破損も発生したため進攻に失敗し、人員には損傷なく基地に帰還した。

二日後の一月三十一日、シムロンより七十粁西北のナスグブ海岸に米軍が上陸し、一五戦隊が出撃した。

三月に入り、十日には猛烈な空襲があり、又侵入して来た米魚雷艇等による艦砲射撃によって舟艇の殆どが被害を受けて使用不能となり、爆雷は次々と誘爆して基地は壊滅状態となった。

一方ナスグブに上陸した部隊とマニラ攻略後一気に南下進撃してきた米軍は、三月の十四日にはバタンガス市に侵入し、シムロンの舟艇基地にも戦車砲や迫撃砲弾が落下し始めたため、基地本部からの撤退命令が出され、残りの舟艇を自ら爆破処理してシムロンを撤退することとなった。

これとともに海上挺進の任務も不能となったので、その任を解かれ、藤兵団の掌握下に集結するため、十六日から専ら夜間行軍で米軍陣地を突破し、バタンガス街通を避けて裏街道であるタヤサン・ロザリオを経て二十二日兵団本部の所在地であるサンタクララに到着した。

ここで戦隊員の大半は、藤兵団と称していた歩兵第一七連隊（連隊長は藤重正従大佐）の各隊に編入され、その多くは第一線部隊として、サンタクララ、サントトーマス地区その他で米軍との戦闘に当たり多数の者が戦死した。

その転属先の主要なものは次のとおりである。

藤兵団司令部へ日比野少佐以下八名（二名戦死）。

第六基地大隊へ杵築少尉、佐々木群長、福山群長（二名戦死）。

第一七連隊第七中隊等各隊へ古谷群長以下十九名（十五名戦死）。

兵団司令部予備隊として岡本第二中隊長以下二十四名（二十二名戦死）。

（伊藤第一中隊長は病気のため既にマニラの陸軍病院に入院その後不明）。

又、本部の西野少尉（第三中隊と共にブラジル丸にて後発となったが、北サンフェルナンドより戦隊主力に追及できた）以下十一名は同連隊の第二大隊、通称市村隊（本隊をマコロド山麓付近に敷陣し、三月下旬から四月中旬までの間、タールス湖東南部のクエンカ、デイタ陣地で米軍と戦闘を行った）に転属を命ぜられ、大半は此処で戦死し、生存者三名は二十年九月マコロド山にて終戦を迎えた。

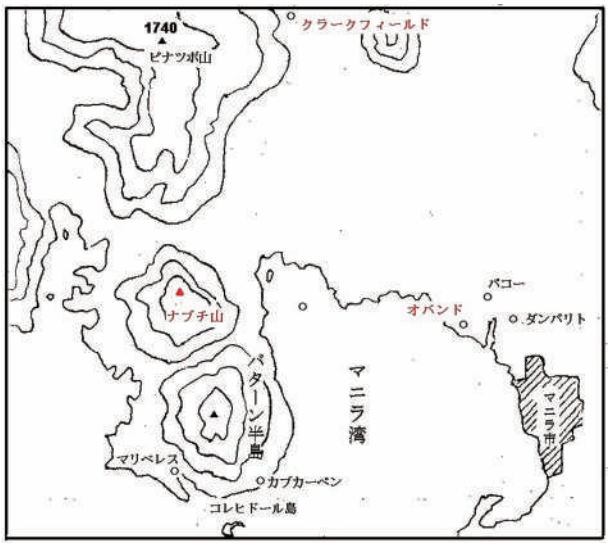
この間、戦隊長は、マルプニヨ山にあった藤兵団作戦本部にあって戦闘計画の指揮に当たっていた。

その後、四月末に藤兵団はバナハオに向け転進を開始した。戦隊長は戦隊員の一部を指揮してマウバン西北方。バナハオ東方のキャンプ・マヤビスに移動した。

その後、第三一連隊第三大隊の残員やマニラ及び他地区から撤退してきた海軍部隊等を含めて、約三百名位が集結したので、日比野支隊と称して、戦隊長が支隊

長となり、同地区を中心に敗戦時まで遊撃戦をしていたが、九月十七日に至り方面軍から派遣された参謀により敗戦を知り現地の収容所に入った。

一方後発船団乗組みとなった本部の一部と、第三中隊の全員（高雄にて病気入院中の森中隊長を除き三十五名。森中隊長は後日本隊に追及できたようである）は、整備中隊主力と共に舟艇二十隻を積載してブラジル丸に乗船して高雄発、十二月二十三日に無事北サンフェルナンドに上陸し、舟艇を揚陸した。（但し爆雷は積載していなかった）




又、本部付の前記西野少尉のみ連絡のため、マニラ経由でバタンガスに先行した。（この時基地大隊の細川中尉が舟艇十隻をマニラまで移送したが舟艇のその後は不明）

第三中隊は倉田群長引率にて本隊に向って南下したが、米軍がリンガエンに上陸、マニラ方面に向かって来たため、本隊への追及は不能となり、第一七戦隊の所在地区に合流することとなった。

二十年一月末頃、上陸米軍の接近に伴い、マニラ市の北方付近に移動し、二月十日から基地第一七大隊らとともにリサール州オバンド付近で、南下してマニラ占領を目指す米軍との戦闘に入り、同州のダンバリット地区で森少尉以下二六名が戦死した。

残存の者は第一七戦隊とともに、バターン半島に舟艇により転進し、以後同半島のナチブ山中にいたが、更に五月から六月にかけ、第一七戦隊の山之内中尉らが、残員を引率して北方のバギオ方面に突破するため、クラークフィールド地区の米軍占領地に侵入した際、これに参加したが、同地区でほとんど戦死するに至った。（この地区からの生還者は一名のみ）

同戦隊の戦死は、将校十一名、隊員七十五名の合計八十六名であった。

海上挺進基地第六大隊は、昭和十九年八月三十一日宇品で、大隊長角谷慎一少佐の下に編成を行なったもので、通称号は暁第一六七九三部隊（比島では第一〇六大隊）と称した。

なお中隊長には、山本大尉、細川佐一郎中尉、河辺　清中尉等がいた。

大隊は九月五日宇品を出航し、大隊主力（大隊本部と各勤務中隊）は、同月三十日ルソン島に上陸した。

一方戦隊の第三中隊とともにブラジル丸に乗船した整備中隊は、十二月下旬にルソン島に到着したが、米軍の上陸により情況険悪となったため、遂に本隊に合流できず、北部ルソンの盟兵団（独立混成第五八旅団）に配属替えとなって、同兵団の他部隊とともに北部において戦闘することになった。

大隊の本隊は、陸路により南下して十月二日にバタンガス州シムロン地区に着き、直ちに同地区海岸で基地設営にかかった。

その後、十一月三日に、急にレガスピーに転進命令が出されたが、これは実行されないで取消された。

又、大隊のうちの鈴木房太郎中尉の指揮する第二中隊は、振武集団に転属を命じられて北上し、マニラ東方の山地拠点で最後まで戦闘を継続していたが、その四分の三は同地区で戦死した。

大隊の主力は昭和二十年の二月に入り、ナスグブ方面からの米軍上陸部隊の接近により、二月二十一日以後サントトーマスの二〇一高地及びタナワン付近の一〇二高地等で戦闘を行なった後、マルプニヨ山に転進し、更に藤兵団の分散計画に伴い、四月下旬になってバナハオ山に転進することとなり、同月二十八日に到着できた。

こうした戦闘状況により、大隊の戦死者は総員八八一名中、七五四名に達し、（大隊長角谷少佐も戦死した）生還者は一二七名であった。

## 海上挺進第六戦隊戦闘行動概要

元第六戦隊群長　故　西野　勝輔

私は豊橋第二陸軍予備士官学校を昭和十九年八月卒業。卒業と同時に見習士官となり同僚九名と共に、「船舶司令部へ転属を命ず」と云う命令をうけ、宇品の船舶司令部を経由して小豆島土庄の特幹教育隊へ到着しました。この時は未だ特攻隊付とは夢にも思っていませんでした。

然し、私達見習士官が到着した十九年八月十五日には既に中隊、群分けは出来ていたようでした。戦隊長の日比野大尉が私達の予備士官学校の区隊長で顔見知りであったことは、特攻隊と云う特殊な部隊では非常に心強く思われました。

編成　戦隊長以下　一〇三名
将校　十五　特幹　八十八

**出陣**

十九年九月十五日編成完結。門司を経由して九月十八日大牟田港より東シナ海へ出港致しました。乗船区分次の通り。

相模川丸
戦隊本部　日比野戦隊長以下　十二名
三中隊　森中隊長以下　三十一名
基地六大隊整備中隊主力
細川中隊長以下　約五十名
比島派遣の一般部隊と同乗
ハンブルグ丸
一中隊　伊藤中隊長以下　三十名
二中隊　岡本中隊長以下　三十名
特攻用爆雷　多数
九戦隊一部及一般他部隊　同乗
台風と敵潜水艦の中、十月四日台湾南端高雄に到着しましたが、米空母機動艦隊接近の報により（後に台湾沖航空戦と云われました）相模川丸の戦隊長以下は高雄市に下船、舟艇も港へ降ろし、空船で退避し、以後此の船に会うことはありませんでした。

六戦隊日比野戦隊長以下四十三名は基地六大隊の細川中尉以下五十名と共に市内の堀江国民学校に宿泊。

十月十二・十三日大空襲を受けましたが、幸い一名の被害もありませんでした。

一方ハンブルグ丸は乗員を乗せたまま香港へ退避しましたが、英軍機による機銃攻撃にて二中隊折笠伍長重傷を受け香港陸軍病院にて十月十九日戦死、特幹の戦死第一号となってしまいました。

ハンブルグ丸は香港より十一月一日高雄へ帰港し六戦隊全部が集結。ところが同船が即時ルソン島へ出港する為、急遽戦隊長も乗船することになり、杵築副官と直轄隊員の緒方・木村、本部予備群の松本博・酒井の五名が共に先発することになり、六戦隊は完全に二つに別れてしまい、戦場も二つに別れて戦闘することになりました。十一月一日高雄を出港したハンブルグ丸に乗っていた六戦隊は

戦隊本部　戦隊長以下　六名
一中隊　伊藤中尉以下　三十名
二中隊　岡本少尉以下　二十九名

高雄を出港したハンブルグ丸は翌二日夜バシー海峡に於て米潜水艦の魚雷攻撃を受け全員海没。八時間泳いだ後、友軍の軍艦に救助されサブタン島に上陸の後、十一月十二日にマニラ市に廻送されたが、一名の損害もありませんでした。十一月二十九日六戦隊の特攻基地のありますバタンガス州シムロンに到着しています。（マニラ市のま南百三十粁位。バタンガス湾の東岸）ルソン島に配備された戦隊としては最南と云うことになります。

**バタンガス湾**

中心のバタンガス市は、マニラからの鉄道の南の終点で上陸に適当な平地もあり、米軍は必ずここへ上陸して来るだろうと大本営が考えていた場所で十粁余四方の小さい湾に三ケ戦隊（六・十三・十四）が配備されていた事で良く判ります。

挺進戦隊には各戦隊に舟艇の秘匿壕、宿営設備の建設、出撃時舟艇の泛水作業等の為一ヶ大隊（約九百名）編成の海上挺進基地大隊が付随してくれて居り、戦隊が出撃した後は一般守備部隊と同様陸上戦闘に入ることになっていました。六戦隊主力がシムロンに到着した十一月二十九日には先着していた基地六大隊によって既に基地は完成されていました。戦隊は特攻により消滅してしまうものとして拳銃、手榴弾しか持って居らず、陸上戦闘を行う事については、教育を含めて全く考えられていませんでした。

基地大隊の場合も将校、下士官は満洲事変や支那事変を経験した老練な方が多いが、兵は任務の為、一応兵器は持っているが、今まで召集も受けず最後迄残っていた未教育の老補充兵であった為、戦隊と同様、殆どの基地大隊が全滅に近い損害を受けました。基地六大隊も八百八十一名の内大隊長以下七百五十四名が戦死となっております。

この重要なバタンガス正面に陣地を構築して米軍の上陸を待ち構えていたのは、関東軍より移駐して来た八師団秋田歩兵第十七聯隊と云う兵の九割以上が秋田県人の典型的な郷土部隊で十九年十二月二十七日以降、ほぼラグナ湖の線以南の諸部隊を併せ藤兵団（兵団長は歩十七連隊長藤重大佐）となり、六戦隊、基地六大隊の全員が藤兵団秋田十七聯隊に配属されて陸上戦闘することになるのです。

二十年一月一日　シムロン在

六戦隊の兵力は　舟艇二十

先着の基地大隊が搬入した由

戦隊本部　戦隊長以下　六名

一中隊　佐々木見習士官以下二十八名

伊藤中隊長マニラ陸病入院。

古谷群長、後発隊の為北サンフェルナンド出張中。

二中隊　岡本中隊長以下二十九名

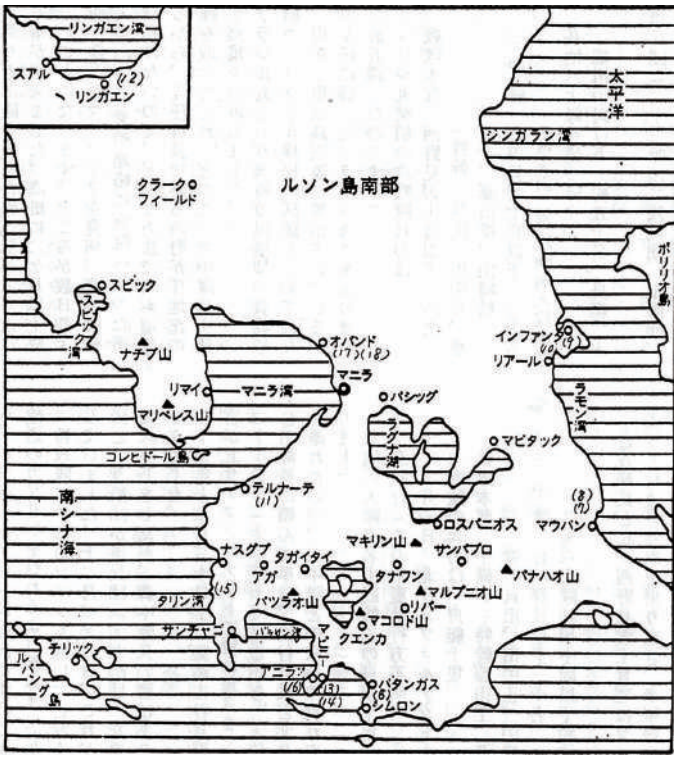
（香港にて折笠戦死）

一方、高雄に残された残留組は、十九年十一月二日ハンブルグ丸海没の報に心配したが続いて全員サブタン島上陸の連絡に一安心し、森中隊長以下各群長の指導のもとに歩兵としての諸訓練に励んでいました（群長達は皆歩兵の出身でした）。

十九年十二月十八日になって、やっと高雄で降りる部隊を乗せた輸送船が入り之に乗る事が出来ました。高雄に二ヶ月以上駐留したことになります。ところが数日前より森中隊長がマラリヤ？を発病、高雄陸病に入院中で、乗船連絡に病院へ行った所「今動けないので、どんな方法でも追及するから、先任群長である西野が任地迄の指揮を取ってくれ」とのことで中隊長を残して高雄を出港しました。

ブラジル丸と云う当時の規格型の貨物輸送船に乗船しました。ブラジル丸乗船の六戦隊兵力は

戦隊本部　西野見習士官以下　六名




ラジル丸は無事十二月二十三日にリンガエン湾北サンフェルナンドに入港、米軍機の銃撃をかいくぐって舟艇を徹夜で降ろしましたが、本隊の所在が判らず、細川中尉と二人でバギオの参謀部を尋ね、基地のシムロンが三百キロメートルも南ですので海上輸送のガソリンを呉れるよう頼みましたが、「特攻隊にやるガソリンも無い」と涙を流していました。十二月二十九日、これが最後という船団が虎兵団（十九師団）を乗せて入港しましたが、森中隊長の姿はありませんでした。

十九年十二月三十日？、突然古谷見習士官が北サンフェルナンドに現れ驚きました。二十年元旦「すぐ戻って来るから」と後を倉田群長に頼んで単身、古谷群長と北サンを離れたのが、三中隊との永遠の別れとなりました。

基地六大隊春名中尉輸送の舟艇十隻とマニラ迄同行（この十隻は行方不明）

二十年一月一日　北サンフェルナンド在六戦隊の兵力は、舟艇十隻及び戦隊本部　予備群　特幹藤田工、藤田俊、貝出、田中正、山崎松

三中隊　倉田群長以下三十名

基地六大隊細川中尉以下約五十

古谷群長と私（西野見習士官）はマニラよりノロノロ列車を乗り継ぎ、米軍機の銃撃の中、バタンガスより舟艇にて（シムロン迄陸路なし）シムロン基地へ二十年一月五日に無事到着。少佐の階級章を付けた戦隊長に後発部隊の北サン到着と森少尉の高雄残留を報告、「明六日北サンへ復帰すべし」の命令を受けておりました。

大尉に昇進した伊藤一中隊長は発病の為既にマニラの陸病へ入院の為、基地を離れておられ一中隊は戦隊長の直轄になっていたようです。

**リンガエン湾へ敵上陸開始**

バタンガス湾に必ず米軍の上陸は近いと信じてシムロンに待機している六戦隊の主力にしても、リンガエン湾北サンフェルナンドの海岸に中隊長不在のまま私の帰隊を待っている三中隊倉田群長以下三十五名にしても運命を分ける大変な六日の夜が明けました。

二十年一月六日未明より三日間リンガ

（特幹　貝出、田中正、藤田工、藤田俊、山崎松）

三中隊　倉田見習士官以下　三十名

（森少尉、高雄陸病入院中）

基地六大隊整備中隊主力

細川中尉以下　約五十名　舟艇二十

船団の編成は、旭兵団（二十三師団）鉄兵団（十師団）等を輸送する十隻位の船団で、バシー海峡やリンガエン湾に入ってから撃沈された船もありましたが、ブ

エンへの艦砲射撃が続き、九日早朝より第一波として十九万の米軍が上陸を開始し、同夜、この附近に待機していた十二戦隊七十隻が出撃し、艦船三隻撃沈の戦果を上げています。此の様な戦況の中、第三中隊はシムロンの戦隊に合流することができず、マニラ北郊ダンバリッド在十七戦隊と共に戦うことになりました。第六戦隊はバタンガス湾シムロン、と一五〇キロメートル離れた二つの戦場に分れて戦うことになりました。

二十年一月十日付にて群長十名予備役陸軍少尉に任官致しました。

**その一、第六戦隊主力の戦闘行動**

バタンガス湾への敵の上陸の可能性は薄くなり海上特攻の機会も判らなくなりましたが、軍司令部は南部ルソンに必ず上陸はあると信じてか戦隊（六、十三、十四、十五、十六）への転進命令は出ませんでした。

シムロン基地はバタンガス市から七～八キロメートル位、陸路は有りません。海岸から五十メートル位は真白なサンゴ礁に高床式のバハイ（家のこと）が点在する漁村跡（四キロメートル四方の住民は極秘基地である為、立ち退きになっていた）で野生化した鶏が朝は時を告げ、卵の落し物、裏の山の斜面には野生の南瓜やトマト、渚に立てば十キロメートル余の正面にカルパン半島が横たわり、そのどこかに十三、十四戦隊がひそんでいる筈、半島の付根あたりにバウアンの町、更に右山陰にバタンガスの市街が望見出来、バウアンの背後には異様な山相のマコロド山（一、〇〇〇メートル）が屹立、左に目を向けるとベルデ海峡を隔ててミンドロ島の北端が断崖になって海に落ちているのが見え、既に此の頃にはミンドロ守備隊と米軍との交戦状況が夜は曳光弾が交錯するので良く判りました。基地の北端に小さな川が湾に流れ込んでいて川口の少し沖に日本の徴用機船の沈船があり魚が良く獲れるということでした。この川が木の茂みから流れ出ているので、数隻の舟艇が隠されていました。日本の飛行機は一機も見えず、北へ飛ぶＢ24爆撃機の大群ばかり見上げ乍ら日を過ごしました。夜の演習では海に踏み入れた足跡に夜光虫がまといつき舟艇の跡を追います。

ひと度米船団が侵入した時は舟艇諸共飛び散って我墓場と化する。目の前のバタンガス湾も敵の現れない日々は真に穏やかなものでした。

二十年一月二十九日早朝、私は未だ床の中でした。突然歩哨がバハイへ飛び込んで来て「敵襲！　船が来ます」渚へ出て双眼鏡で見るとミンドロ島方向からゴマ粒程の舟艇が、数は判らないが湾内に侵入して来るのが見えました。非常呼集がかけられ全員が固唾を呑んで身構える中、舟艇はシムロンの沖を通過してバタンガス湾へ直進（米軍の上陸用舟艇とはっきり見えました）し、同地を警備している藤兵団十七聯隊の六中隊と交戦しながら着岸しては後退を二、三度くり返し乍ら三十分位であっさり引き上げて行きました。徹底的な空爆も艦砲射撃もせず四隻の舟艇のみで白昼堂々と上陸して来るとは考えられず、威力偵察（日本軍の兵器、兵力を偵察する）か、陽動作戦（他所へ上陸するのを隠す為わざと別の所で動いて見せる）と直感しましたが、或いは今夜から明朝にかけて米船団の入湾も考えられ緊張の一夜でした。

その二日後二十年一月三十一日、夜明けより三時間の空爆と艦砲射撃の後、遂に南部ルソンに米軍が上陸して来ました。シムロンより七十キロメートル程西北の西海岸、藤兵団に配属されている弘前三十一連隊の一ヶ大隊が守備しているナスグブの海岸へ空挺十一師団他計約二ヶ師団の上陸がありました。同夜十五、十六

戦隊一部の出撃が敢行されましたが、戦果は確認されませんでした。

装備の悪い一ヶ大隊の日本軍に対して、飛行機、戦車を伴う二ヶ師団に近い米軍とでは話になる筈もなく、その上二月二日朝、背後のタール湖北岸のタガイタイ高原に多数の落下傘部隊の降下があり、三日間の激闘の末、陣地は突破され上陸軍の多数が北上してマニラ攻撃に向い、残りはタール湖の北側と南側を藤兵団攻撃の為東進しました。

もうこれで戦隊を出撃させる機会は無いと判断した兵団長は各基地大隊を陸戦に転用する為、兵団の戦域への転進を二月二十日前後に発令し、シムロンの我が基地第六大隊も二十一日頃北上して行き基地も急に淋しくなりました。基地第十三大隊、基地第十六大隊も早々と兵団域に入り、基地第十五大隊長は十五、十六戦隊を指揮下に入れて、タール湖南岸のマコロド山の兵団十七連隊第二大隊に配属されました。

**三月十日シムロン基地潰滅す**

陸軍記念日朝より、猛烈な戦闘機による機銃掃射が海側より山側より交互に行われ、いつの間にか侵入して来た魚雷艇よりの艦砲射撃で舟艇の殆どが吹飛び爆雷は次々と誘爆して基地は一面火の海となって夕方迄燃え続けました。

私（西野）は基地大隊が転進に際して残して行った堀中隊の一ヶ小隊を率いて基地のすぐ後ろの稜線に後方警備の陣地に居て眼下の基地潰滅を手をこまねいて見ている外無く、機銃弾は頭をかすめて飛び、魚雷艇は馬鹿にした様に渚の百メートル位迄に近付き、速射砲を舟艇壕や居住地区に射込んで行きました。隙間をぬって基地へ下りて見ると何もかも無くなっていましたが、死傷者は無く特幹達は案外明るく「永井少尉が小銃で高速艇の米兵を海へ射落した」と手を叩いて喜んでいました。

此の日山の陣地から双眼鏡でバタンガスの市街へ米軍の戦車が星条旗を振る比住民を満載して続々と侵入するのが望見出来、六大隊堀中隊から派遣されていたバタンガス警備隊が玉砕したのも此の日でした。

日本軍の敵は米軍、比島軍だけでは無く、米軍の上陸と同時に寝返った原住民ゲリラ達が最大の敵でした。老若男女を問わず、手榴弾、拳銃を持ち（アメリカ製の）日本兵の単独や少人数の部隊は必ず襲撃されると云う状況でした。

**六戦隊へ転進命令**

二十年三月十四日夕刻、遂に藤兵団司令部より「サンタクララ（マレプンヨ山西麓）の司令部へ転進すべし」の命令を受電しました。いよいよ陸上歩兵戦闘に入るのですが、海上特攻の訓練だけしか受けていない、小銃さえ持っていない、しかも伍長の階級章を付けた少年達を、秋田歩兵十七連隊はどう使おうと云うのだろうか。基地大隊の多くの未教育の老人達に何をしろと云うのだろうか。

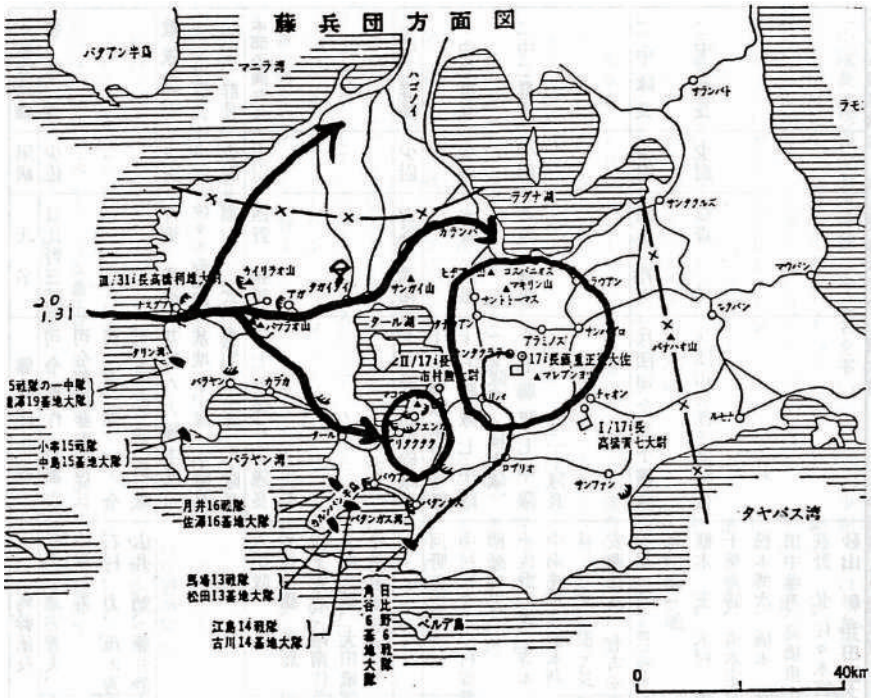
私達群長七名は全員が歩兵出身だから、今日からでも小隊長クラスとして即戦力で使用出来るのですが、十五日は転進準備を急ぎ、特に川に隠していた舟艇（たしか二隻）を自分の手によって破壊することには心情的に相当抵抗を感じました。

戦隊長判断によりシムロン出発は十六日日没と決まり、尖兵長を命ぜられた私への命令は「既に占領されているバタンガスを避け、東方のタヤサン―ロザリオ道をアラミノスへ向かって前進。リパヒル（丘）にて友軍と接触する」と云うものでしたが、実際は少し手前のサンタクララの椰子林に兵団司令部はありました。到着は三月二十二日の早朝だったと思います（転進経図）。

戦隊長以下六十五名、一名の死傷もな

く整然と兵団に到着した六戦隊は即日多くが十七聯隊の各隊に配属命令が出され、戦隊としての形は完全に無くなってしまいました。

将校の配属は兵団の命令に依り、兵の配属はおそらく戦隊長の命令に依ったものだったと思っております。




三月二十二日朝、兵団到着直後、私は今転進して来た道を逆戻りして、既に敵に囲まれたマコロド山の六中隊付を命ぜられ同夜出発（特幹十名と共に）した為、本隊の事は全く判りませんが、生存の方々や戦史より推察致しますと、完全に解隊されたと考えられます。

シムロン基地より同道転進して来た基地六大隊三中隊がタナワンの大隊陣地に追及に当ってその小隊長として配属された佐々木少尉と福山少尉は別れて三日目にタナワンにて戦死となっています

サントトーマス・カナワンが陥落し足許のサンタクララの部落に敵影が動き始めた三月末頃からは之らに斬込攻撃が行われる様になり特幹岡田伍長が最初の犠牲だったと思われます

ラグナ湖畔の激戦からマキリン山麓を経て、サンタクララの団に帰り付いた十七連隊種市第七中隊の補充として、永井少尉、谷口少尉と十五名の特幹が配属され（三月二十七日頃？）兵団司令部正面の最重要地点の戦闘に参加することになります。

四月三日サンタクララに入った米軍に対し先制攻撃を決意し永井少尉（第一小隊長）に特幹六名を率いて斬込を命じました。

中村富之、中村福義、中尾嘉市
寺本采　小佐野行雄、柳瀬幾男

四月三日永井隊長以下全員戦死。

マレプンヨの山地に拠った藤兵団攻撃米軍の拠点サントトーマス（三月二十五日陥落）に対する斬込に特幹が混って出撃することは当然あったと思われます。

岡本第二中隊長は杉森少尉と特幹二十二名を率いて司令部付近に予備隊的に存在していたと推測して居ります。この隊からも当然斬込要員は抽出され聯隊の兵と混成で出撃し、四月二日サントトーマスの町で特幹高橋重正君、同田中藤寿君が戦死されています。

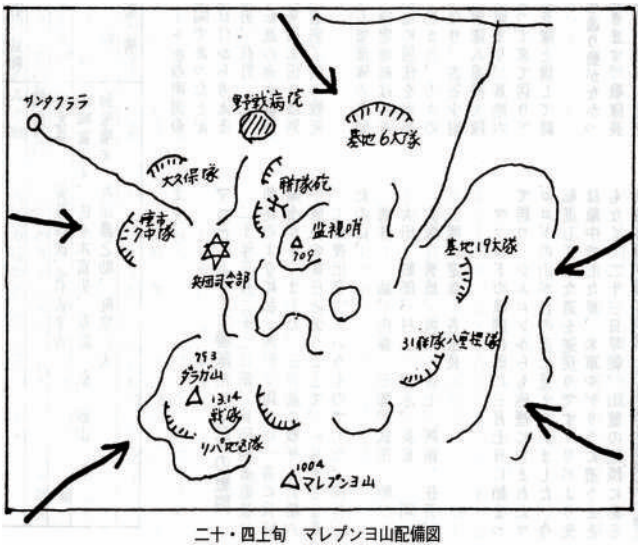
二十年四月十日、いよいよ兵団正面の種市七中隊にも米軍接近の緊迫した空気が流れ、岡本隊へもサントトーマス夜襲の命令が下りました。

隊長少尉　岡本礼夫
木村勇、豊島孝七、榧木宏
島田顕一郎、寺岡通、渡辺清成、

千葉寿勝、岸義道

若し杉森少尉が横に居て岡本中隊長が斬込隊長を買って出たとすれば何か期する所があったのか、血の気の多い連中ばかりを送って連れ出しているのも気になる所です。岸伍長のみ生還しましたが、後日マレプンヨ戦で戦死している為戦果は知る由もありません。

マレプンヨ山の激戦は、四月十日司令部正面軍旗台の種市七中隊で始まりました。前述のように此中隊には永井、谷口両少尉と特幹十五名が配属されていましたが、既に永井少尉と六名の特幹は戦死して、此戦闘には中隊指揮班員として安藤伍長、他は谷口少尉の第二中隊に所属して働いたものと思います。



二十・四上旬　マレプンヨ山配備図

この戦闘にて戦死は

七中隊第二小隊長　少尉　谷口春男

新田茂、中南達雄、松本利一、

樋口博生、林武、嵯峨晟実

激闘を生残った安藤、有吉両伍長はバナハオ転進を経て復員されましたが、根元長一伍長はバナハオ山中にて戦死された事が確認されております。

少しさかのぼって、六戦隊が兵団へ到着した直後、日比野戦隊長は兵団の作戦参謀に就任、三月二十五日のサントトーマス戦は地区隊長として、作戦指導に当って居られる記録があります。

軍旗台で戦闘が始まった頃は参謀として戦域を駆け巡って居られたと思います。

又、古谷少尉は曲射砲出身の経歴を買われ、負傷した十七連隊曲射砲隊長の後任として、三月二十七日に就任転戦の最中であったでしょう。

二十年四月二十五日司令部正面の種市七中隊はまだ頑強に一線を確保していましたが機械化した米軍は司令部の北側に新しく戦車道を作り接近して来ました。兵団長（十七聯隊長藤重正従大佐、中将の襟章を付け将軍と自称）は東方のバナハオへ兵力を移す決心をし円陣を組んで正に玉砕寸前の各陣地に二十八日夜より三梯団に分けて転進すべき命令を下しました。

恐らく各隊は混乱して、バラバラであたと思います。岡本隊の残員を指揮して司令部付近での戦闘に巻込まれたと思われる杉森少尉の一隊も生存者が無く状況は残念乍ら不明です。杉森隊の戦死は次の通りです。

少尉　杉森昇

伍長　清水定良、松本博次

永江政己、橋本皓

岸義道（斬込では一人生還したのに残念でした。）

結局四月二十八・二十九日（天長節）のバナハオ転進に参加出来たのは、

藤兵団司令部　日比野三郎

緒方秀夫、土居寿、石村力、

茂木秀夫、広井勉、藤井静雄

十七聯隊曲射砲隊　古谷武和

十七聯隊軍旗小隊　河野正己

十七聯隊種市七中隊　根元長一、

安藤修次、有吉幸吉

兵団岡本予備隊　山崎富士夫、荻野弘

佐々木富男、砂山彰

加来福未、
井田謹之助、梶原正夫
基地第六大隊　杵築清治

バナハオ山二、一八八メートルの南側の大地隙への敵中突破は二週間であったと記録されている。戦死された日付から考えると、山崎富士夫、佐々木富男、荻野弘、砂山彰の各伍長は恐らく転進の途次戦死されたものと考えられ、加来福未伍長は到着後出合った者も居り、転進完了後の戦死と思われます。

日比野戦隊長は梯団長として部隊の先頭を転進していたが、兵団の指定地には到着せず遙か東方のマヤビス山地に居住を定めましたが、比較的食料にも恵まれ、方々の部隊の残員が集まるようになり、古谷少尉率いる曲射砲小隊も三十一聯隊八重樫大隊の残員と合流して此の地に留まり、基地六大隊の杵築少尉以下も集まって来て居り三百名位になったので日比野支隊と稱して終戦迄頑張っていました。

兵団司令部としては、命令通り動かなかったので相当怒っていたと聞きます。戦隊長に付添っていたと思われる緒方秀夫、土居淳之助両伍長は此の地で戦死となって居ります。

マコロド山十七聯隊市村大隊の戦闘

二十年三月二十二日朝、兵団到着直後に前述のように私（西野少尉）に一番に兵団命令が下りました。三日前に戦死した第六中隊長の後任と云うことで、「兵十名を率いて今夜出発」というものでした。同行したのは、

酒井涵、内藤三郎、武田昭二
大田厳郎、村上定志、長島司
大塚秀雄、坂口佐七、阿南住芳、
三浦定彦　各伍長

マコロドの戦闘は既に三月七日に始まって居り、シムロンからも砲煙に包まれたマコロドの山が目の前に見えていました。今転進して来た道を逆戻りです。リパより先は敵中でしたが、米軍やゲリラに遭うこともなく、二十三日早朝、山麓の地隙にある大隊本部洞窟に到着「六中隊を指揮すべき」兵団命令と到着を申告した所、病床にあった市村少佐は「六中隊の指揮は先任准尉に任せとけ、西野少尉には本部付を命ず、副官を助けてやってくれ」と云うことでした。予備役の新品少尉にしての第一線の中隊長職は、この上もない栄誉と張り切っていたのにガッカリしましたが、後で良く考えると、十七聯隊の様に秋田県人ばかりで編成された郷土部隊の而も激戦中での中隊長の後任に訳のわからない漁撈隊（戦隊・基地大隊の秘匿名）の将校では中隊の力が出し切れるかとの不安は充分考えられやむを得ぬ決断であったことは察せられる。

攻撃の始まる迄まだ少し時間があると下士官に陣地の様子を案内してもらいました。左陣地正面は既に一木一草もない荒野と化し、目の前の国道をリパ方向へ続々とトラックが走り（昨夜進んで来た道です）国道の向側には転々と米軍の幕舎が列び、肉眼で住民ゲリラが地雷を埋設しているのが見えました。

「少尉殿もう危ないです。敵の今日の砲撃の一発目が来る頃ですから帰って下さい。」

本部下士官に促され、洞窟へ帰り着いたとたん日課の様に米軍の攻撃が始まりました。良く来られたものだとゾッとしました。

米軍の日課は先ず「どれだけ砲弾を持っているのか」と思う程砲弾を打ち込みます。朝八時になるとサラリーマンの出勤のように米兵を満載したトラックが数台戦車を連れて現れます。肉眼で見える当たりでトラックを降りた兵隊は戦車の後ろをソロソロと日本軍の陣地へ近づいて行きます。この頃には観測用の軽飛行機

がどこからともなく現れ、超低空（顔が見える程）を時々空中で減速しながらこちらの様子を連絡しているらしく、要所要所に的確に砲弾が落下します。

戦車の来ぬ間、陣地の目の前迄進んで来ます。我慢出来なくなって射撃を始めるとそれを待っていた戦車砲が直撃で吹き飛ばします。

戦車砲と戦車の機関銃でほぼ制圧したと感じられるころ、隠れていた米兵が散開して各個のタコツボに近づき、手榴弾を投込み殲滅して行くと云う戦法です。

山腹に隠れている大隊砲が一発でも発射すると百発位お返しが来ます。パラシュートを付けてフラフラ落ちて来て爆発する落下傘爆弾は恐怖そのものでした。夕方五時頃になるとサッサと一日の勤務を終えて幕舎へ帰って行きます。市村大隊（八師団秋田歩兵十七聯隊第二大隊）は大隊と云いましても第五中隊第七中隊を北部の戦闘に引き抜かれ、歩兵中隊は六中隊のみ、機関銃中隊、大隊砲小隊、作業小隊、通信分隊のみで戦闘が始まった三月七日現在三七二名であったと試算して居ります。之に重砲が一門一五五名が配属されて居りましたが、歩兵の戦力として加えるべきか少々疑問です。兵団命令或いは基地大隊本部長の命令に依って配属された者、各戦域で本隊と別れてしまい砲声を頼りに三々五々流入して来た者、時期はまちまちですが、戦隊六・十三・十四・十五・十六を併せて一四二名が参戦し一一八名が戦死、基地大隊は十四・十五・十六併せて三九六名、海軍と軍属船員若干名、基地大隊二五六名戦死。

延人員では九〇〇名位になりますが、激戦中マレプンヨへ転進した者もあり、最後の四月十八・十九日の大激戦は三〇〇名前後の兵力であったと思っています。

連れて来た特幹十名は六中隊長代理小林准尉に託し、時々の状況報告を依頼するより外ありませんでした。

三月初旬には既に十五・十六戦隊員が十五基地大隊長の指揮で到着していた様です（主として作業隊に配属）。

私が着任した三月二十三日付で米軍は「当陣地の国道東南部は制圧した」と公表していますが、北西の我陣地には手こずっていました。

三月二十五日毎夜命令受領に大隊本部へ来る六中隊の連絡係下士官から、内藤三郎伍長の戦死を報告されました。デタ陣地で落下傘爆弾によるものでした。

前述のように夕刻米軍が引き上げて行くのを待って、斬込隊が出撃するのです。マレプンヨの戦闘でそうであった様に兵器を持たず歩兵戦闘に慣れていない特幹や基地大隊の兵を斬込に多く使ったのもやむをえなかったと思われます。長島司伍長は二度目の斬込で戦死と聞きました。

敵は四月十八日を期して総攻撃を行うと飛行機からビラで予告し、新らしい部隊と交代し、砲兵大隊戦車中隊を増員し、住民ゲリラも多数動員して、すさまじく攻撃をかけて来ました。

着任時はジャングルだった各隊前の大きな渓谷は爆撃と砲撃に焼けただれガソリンの投入によって草木一本もない丸裸になってしまいました。

砲弾は一分に百発近く、各陣地の玉砕が続きました。十八日はどうにか耐えました。

夜になって陣地方向より各隊洞窟前面の斜面に、いつの間にか戦車道が切敷かれていることが判り、明日はどうなるのだろうか、わからなくなりました。

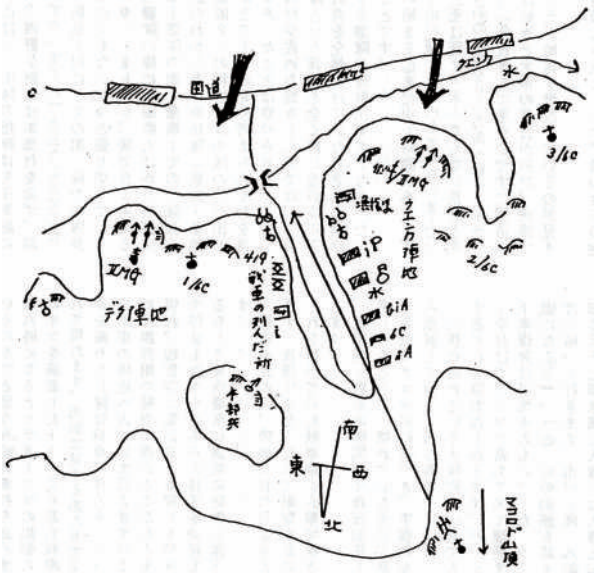
十九日早朝より昨日にも増して猛烈な砲撃で始まり、大隊長室のローソクが爆風で何度も消える程でした。この戦闘で村上定志伍長は戦車砲で飛び散り、大塚秀雄伍長も戦車砲の直撃を受け、狙撃兵として優秀と大隊長に賞詞を貰った最年少兵武田昭二伍長も戦車機銃で散って行

きました。

太田厳伍長はデタ側の戦車道で肉迫攻撃に飛出した所を機銃に射たれ自爆したと聞きました。

目の前の渓谷を米兵が走り廻り本部の洞窟にも爆弾が投げ込まれ「デテコイ、デテコイ」と叫びます。

突然洞窟の上からダイナマイトを仕掛けられ壁ががらがらと崩れはじめ「もっとたくさん」と土民兵の声が聞こえます。



クエンガ陣地の配備要因（20．3～4）

とうとう午後には前の稜線に戦車が五・六輌並び（二百メートル位？）砲をこちらへ向ける様になり、射角の関係か一発も発射しませんでしたが、上半身裸になって戦車にまたがり、猫が半死の鼠をなぶる様にゲリラが洞窟に発破をかけるのをタバコを吸い乍ら見ているのが双眼鏡では、腕時計迄見えるのです。

明日攻撃が始まれば玉砕は必至です。病身の市村大隊長はマコロド山頂への脱出を決心、二十日〇時脱出開始、六戦隊で脱出に参加出来たのは

少尉　西野勝輔

伍長　酒井涵、阿南住芳、

坂口佐七、三浦定彦

六中隊の残員と共に脱出した酒井涵伍長は負傷していたらしく、遂に山頂迄登り切れなかった。又、坂口佐七伍長は私達三名に見取られ戦病死した。

山頂陣地で西野小隊を編成戦隊二十一名、基地大隊十二名、海軍三名、船員八名、合計四十四名でしたが、内戦死一名、戦病死二名、行方不明一、二十年九月十九日終戦によって六戦隊で下山したのは西野勝輔・阿南住芳・三浦定彦の三名でした。

結局終戦により生還出来た六戦隊員は十七名でした。

**その二、第六戦隊第三中隊他の戦闘行動**

第六戦隊第三中隊他の北サンよりの行動

通信機を持っていない此部隊とは終戦迄全く連絡はとれず、共に戦ったと思われる他部隊の話よりの推測しか出来ません。

シムロンの本隊で二十年一月某日

「六戦隊の一部がマニラ付近に於て川越中佐の指揮下に入った」旨受信し、艦砲射撃や米上陸軍を掻い潜ってマニラ迄南下してくれたのだな、と一安心した記憶があります。発信は恐らく、その頃まだマニラに在った第二基地隊本部連絡所（南部ルソンの戦隊及基地大隊を指揮していた）からではなかったかと思っております。

二十年二月某日「六戦隊は舟艇にてバターン半島へ逆上陸（既に敵に占領されている場所へ再び上陸すること）を敢行した」との無電を受信しました。

北サンより砲撃の中から米軍に追われる様な戦況の中を、どのような状況で二

百キロメートル南のマニラ迄移動出来たのか、今でも不思議に思っています。

防衛庁の公刊戦史にも此部隊の行動、戦闘に関しては一行一句も出て来ません。唯一同行しておりました基地第六大隊の整備中隊長細川中尉が防衛庁へ復員後提出された行動状況によりますと、

「二十年一月四、五日頃（砲撃の始まる前日です）舟艇十をトラック輸送にて北サンを出発。南下して南サンフェルナンドの南方で橋が爆破されていて渡れない為、軍命令により一旦舟艇と共にバギオに戻り、更に軍命令によってリンガエン湾のアトックという町の川へ舟艇を降ろし、細川中尉は盟兵団に配属された。」と云うもので、当然同行したと思われる戦隊員三十五名に関しては一言も書かれて居ませんし、戦況、地点、走行距離等から不合理な報告書であると考えられます。防衛庁も確実性が薄いと見たのか戦史には一字も採用されて居りません。もし戦隊の人員のみトラックで先発して橋の爆破される直前に通過して居れば、ダンバリッド（多分第三基地本部の在ったオバンド）へ到着出来たと思いますが、そうすると北サンフェルナンドで戦死の小松栄君がなぜ一人で戦隊を離れていたのかと云う事になります。北サンではなく南サンフェルナンドで戦死ならば一月十日に舟艇と同行して戦隊の三十五名もここまで南下していたのかと考えられるのですが。

**三中隊他の戦闘**

下図（円）内がマニラ市街、その上小斜線がダンバリッドのあるオバンド地区です。図の通り二十年二月四日より米軍三十七師団の一四五聯隊の攻撃が始まっています。

川越基地本部長指揮でこの地区で戦闘したのは、

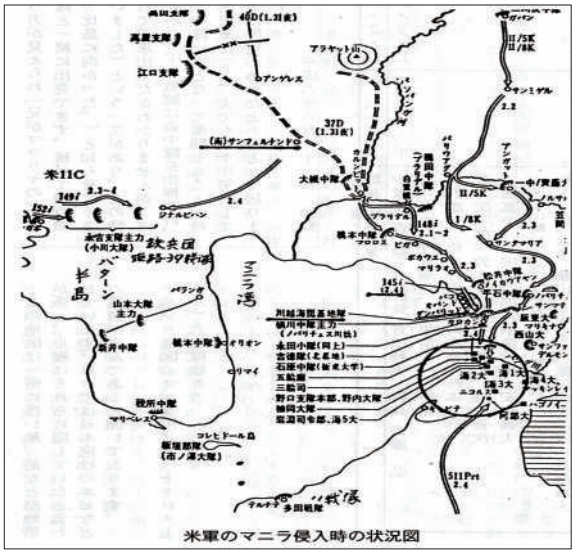
六戦隊一部

十七戦隊一部約二十名（舟艇七十）

基地十七大隊　基地二十大隊

海上特攻の訓練だけしか受けていない、而も小銃も弾薬も持っていない素手の少年兵が、戦車飛行機と無数の大砲に援護された米正規軍とのルソン島最初の陸上戦が如何に悲惨であったかは想像に余りあります。（ルソン戦の殆どの戦隊がそうであったように）

戦死は全員ダンバリッドにて二月十三日となっていますが、二月十一日に安東少尉が北隣りのオバンドで戦死して居り単独とは思われず、後記のバターン半島へ脱出した者もオバンドより出発した模様で、戦死場所、月日は戦闘が終結した月日に、場所も最も戦死者が多いと思われるダンバリッドに一括されたのでは無いかと思われます。



米軍のマニラ侵入時の状況図

**舟艇によるバターン半島逆上陸**

オバンド附近で地区最高指揮官である川越中佐戦死、十七戦隊富田戦隊長は舟艇を温存し、再起を期する為、マニラ湾を横断してバターン半島への転進を計画、二月十一日より数次に分けて実施されま

したが、二月十一日オバンド附近ピーガワン河口を発進する舟艇に六戦隊の一部（次の七名）が同乗してマニラ湾を横断し二月十二日リマイ附近に上陸しています。

松田勇　出口政樹　桑原三丸　植村和司
小原弥寿夫　田中正雄　長田正雄

この十七戦隊の大移動が、シムロン在の六戦隊本部への「バターン半島へ逆上陸」の無電になったと思われます。七名のリマイ附近上陸の状況から考えても、当然十七戦隊と行動を共にしたと思います。

オバンド地区（マニラ市北約二十キロメートル）六戦隊戦死者

十七戦隊の二中隊長石井不二郎中尉（二十・六・二十クラークにて戦死）の日記が戦闘中米軍に拾得され、戦後日本へ返還されましたが、その中の二十年四月二十三日に特幹長田という名前が出て来ますが六戦隊の長田正雄君に違いなく、この日頃迄は七名共十七戦隊と同行してナチブ山辺を北部の方面軍に合流すべく北上中であったと思われます。

既にこの時期ナチブ山にはバターン半島の守備に任じていた十師団三十九聯隊（姫路）鉄兵団永吉支隊が集結して居り上陸した戦隊員はこれらの陣地を通過して更に北上しましたが、長田君のみこの地で終戦を迎え生還されて居ります。

戦場の運命は紙一重と云われますが、十七戦隊と北上を続けた六名の方はクラークの飛行場群突破の斬込みで戦死となって居ります。

二十年五月十日
クラーク　植村　和司

六月十八日
出口　政樹　小原弥寿夫
桑原　三丸　田中　正男

八月三日
松田　勇

以上で第三中隊の行動概要は終わります。戦没者の亡くなられた直接の状態は全くわかりませんが、ルソン島のどこへ上陸され、移動され、どのような戦況で亡くなられたかを、少しでも判明すれば幸甚と存じます。

以　上

オバンド地区の戦死者

| | | |
|---|---|---|
| 20・2・11 | オバンド | 群長　安東　孝<br>中隊長　森　照人<br>群長　倉田　利男 |
| 20・2・13 | ダンバリッド | 群長　斎藤　弘<br>石井光也、今坂潮見、乙黒清三、小野常一、小野謙一、角川外與、片岡貞幸、杉本　升、菅井栄一郎、鈴木俊信、谷石英一、橋本善次、三浦嘉美、三国宗四郎、宗像幹夫、安田義夫、山崎松次郎、横井政男、横坂賢三、和田良民 |

## 海上挺進第七戦隊及び基地第七大隊

元隊員　中溝　二郎

海上挺進第七戦隊は、暁（比島到着後は威）第一六七八三部隊と称し、陸士五四期の内田旭一大尉を戦隊長とし、第一中隊長斉藤克己中尉（陸士五五期、十二月に大尉となる）、第二中隊長岡田茂穂少尉、第三中隊長嶋清少尉（何れも陸士五七期）、本部付将校（副官）として柏木有持少尉（幹候九期）がおり、各群長は前橋予備士官学校出身幹候一〇期の見習士官（二十年一月少尉）、戦隊員は特幹一期生（十九年十一月伍長）であった。

昭和十九年八月末から豊島基地で訓練を行なっていたが、九月十六日付で宇品で戦隊の正式編成を終り、九月二十二日に舟艇の受領を終った後、戦隊全員は輸送船多門丸に乗船し、博多港、三池港等に寄泊した後比島に向け出航し、途中十月五日に高雄港着台湾沖航空戦退避のため高雄市内に上陸し、輸送船団は香港へ向かった。

台湾沖航空戦の後、十一月一日本部及び第三中隊は先発の船団編成となったハンブルグ丸に乗船（第六戦隊の二コ中隊及び第九戦隊の一コ中隊も同乗）、高雄港を出発したが、ルソン島の北端に近いサブタン島西方海面で、米潜水艦の魚雷攻撃を受け、その二発が命中した。乗員は海中に退避し翌日海防艦に救助された。船は沈没しなかったが航行不能に陥ったため、翌日味方の海防艦の砲撃でこれを沈めた。

救助された戦隊員はサブタン島の入り江にて他の僚船に移乗し、十一月十一日マニラ市に上陸、十三日大発でマニラ湾を横断し、コレヒドール島南桟橋付近において集積されてあった㋓艇を受領、海を隔てた北側バターン半島西端のマリベレス基地に移り舟艇の整備、訓練を実施した。

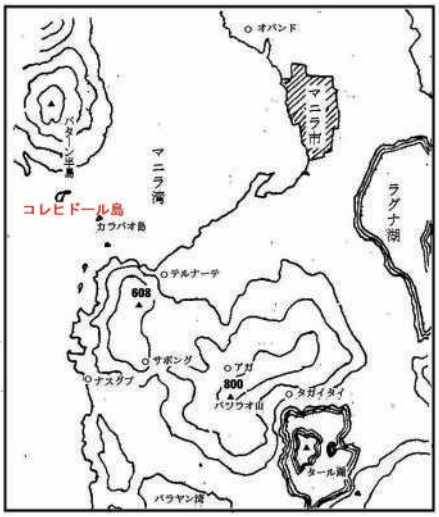
この時期マニラ港に入港した輸送船に積載されて来た㋓艇の多くはコレヒドール島に集結されていたようである。

後発となった第一、第二中隊は、十二月五日になって、ようやく船団編成となり、日昌丸、和浦丸、鴨緑江丸など五隻の高速船団で高雄港を出発し、十一日マニラに到着、十二日パシッグ川上流の戦隊仮本部に向かい、此処で戦隊長以下マリベレスから移動して来ていた先遣隊と合流し、任務地に指定された東部ラモン湾のタヤバス州マウバン地区へのトラック輸送を開始し、同地区のバライバライ河の奥地河岸に設定された秘匿陣地に展開した。

このうち第一中隊第三群、第二中隊第三群（群長大和田源蔵及び鍋倉義高（いずれも幹候一〇期））等十七名は、和浦丸に乗船し、十二月十一日にマニラに着いたが、上陸後本隊との合流に手間取っていた。

十三日夕刻ルソン島西南部に隣接するミンドロ島付近に敵艦船が出現した急報がマニラの司令部に伝わり、第七戦隊本部と合流しようとしていた前記二コ群は移動中止命令を受けてマニラ防衛のため本隊と離され、十二月十五日にマニラ北方のオバンドにあった第一七戦隊に配属され、更に同月の二十八日付で、今度はマニラ南方のテルナーテにある第一一戦隊に転属を命ぜられた。

この二コ群が同地にいる内にマニラが陥落し、更に米軍は南下してきたため、戦闘に入り、特に三月十日のテルナーテ河岸の米陣地への斬り込み戦で十一名が戦死した。なお残員もその後の戦闘等で



五名が戦死し、結局七戦隊でこの地区から生還できたのは大和田少尉一名のみとなった。

なおマウバンの本隊には、先着していた第八戦隊の第二中隊が同地にいたが、第八戦隊は戦隊長（秋山大尉）を始め、第一、第三中隊は遂に比島に到着不能となったため、ここで第七戦隊長の指揮下に入ることとなり、第四中隊と称していた。

昭和二十年に入り、基地大隊はマニラ地区防衛隊として転用され、戦隊のみでは陸上戦闘には向かない状態になった。

そのため木暮支隊長命令によりマウバン基地を放棄し、第一〇戦隊の配備地域となっている同州のインファンタ地区のトンゴヒンに海上転進を行なうことに決まり、一月二十八日及び三十日に第一〇戦隊艇の先導により同基地を出発し、トンゴヒンに到着したが、この間にラバヤット付近において舟艇故障のため海岸に不時着した戦隊員（第八戦隊山田中尉以下十二名）とゲリラとが交戦となり、七戦隊員五名のうち三名（鍵山・近藤・清水各伍長）八戦隊員七名中五名の戦死者を出した。

二月二十七日には第一〇基地大隊員の応援を受けて、転進の際の行方不明者の捜索を兼ねて、南部海岸線方面ラバヤットの討伐を行なった。しかし七戦隊の二名（清水・鍵山）がゲリラにより惨殺された現場は分かったが、その他は不明であった。

各戦隊の基地大隊の主力は殆ど全員マニラ東方山地の守備に転出したため、第七ないし第一〇の戦隊をもって東部地区集隊を編成することとなり、第一〇戦隊長菅原少佐が同地区の先任者であったため、集隊長となり、第七戦隊もその指揮下に入ることとなった。

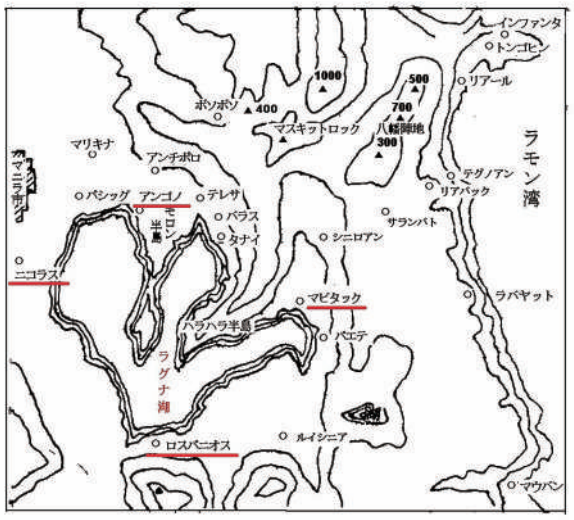
更に振武集団長（横山中将）の命令により（果たして命令があったかどうか不明である）、舟艇をマビタックから発進させてラグナ湖を横断し、マニラ市南部のニコラスフィールドに斬り込みを図ることに決した。

三月十日に戦隊の主力は、第八、第一〇の各戦隊中の一コ中隊づつとともに、舟艇三二隻を陸路輸送の方法で、ラグナ湖東湖畔にあるラグナ州マビタックに移動を開始し、四月二日までに移動を完了した。

そして四月三日内田戦隊長の指揮のもとに発信、パシッグ付近に上陸を図ったが、湖岸（アンゴノ附近）に到着した頃、陸岸にいたゲリラの部隊と交戦になり、ほとんどが戦死（この時の生存者は一名といわれる）し、内田戦隊長もここで戦死した。

なお後呂武少尉（幹候一〇期）以下数名と第八戦隊小島正実少尉（幹候一〇期）以下九名の分乗した舟艇は翌日未明、ラグナ湖南岸ロスパニオス附近に漂着した。やむなく舟艇を沈めて上陸したが、この地域一帯は既に米軍の占領下になっていた。そのためマニラ斬り込みを断念リアールの挺進基地に帰還することにした。

然し、しばしば米軍・ゲリラ隊と遭遇し、これらと交戦を続けながら敵占領地を突破しなければならないため、七戦隊の後呂少尉以下死傷者が続出し、結局八戦隊の小島少尉以下四名が一ヶ月以上経過後の五月下旬漸くリアール基地に辿り着いた。



（この時の第七戦隊の戦死者名は後呂少尉以外は分かっていない、従って九月十二日インファンタ戦死者の中に含まれている）

一方、嶋少尉の指揮する第三中隊の内、三隻の舟艇は靄のため方向を見失い、モロン半島の西岸付近に上陸することができたが（パシッグ付近と思いこんでいた？）米軍陣地に斬り込みの寸前に発見され、一名（井上三郎伍長）を残して全員戦死した。

その後井上伍長は、状況を報告するため日本軍陣地を求めて地理不明の山中を三ヶ月以上彷徨し、八月中旬漸く第七基地大隊の陣地にたどり着き、生還した。

又、第七戦隊第一中隊長斎藤大尉（陸士五五期）は、舟艇故障のためラグナ湖中央部北岸に上陸、リアールに帰還していた。（ただし昭和二十年一月五日戦死になっているが？）

その他、東部に残留していた者も五月以降、第九・第一〇等他の戦隊員と共に通称八幡陣地を拠点として、リアールの米軍基地に斬り込みを行なう等、来襲してきた米軍としばしば戦闘を行なってきたが、二十年八月八日、第九戦隊主力及び第八・第一〇戦隊の一部が、パエテ東方の木暮支隊直轄の隊として南下していった際、七戦隊員は全員残留し斎藤大尉の指揮下にあって引き続き自活活動を行いながら米軍・ゲリラ部隊との交戦を続けていたが、全員この東部地区で戦死したものと思われる。（ここからの生還者がいないため詳細は不明である。昭和二十年九月十二日、タヤバス州インファンタ戦死になっている）

他に台湾の高雄において病気入院のため本隊に遅れ、二十年一月になって飛行機便にて漸く比島に到達したが、本隊に合流することが出来ずやむなく第一四方面軍教育隊に配属され、北部ルソンにおいて転戦した者が二名（大谷久夫、林田弘）いるが、一名（林田弘）はヌエバビスカ州バンバンにて戦死している。

同戦隊の損害は、将校十四名、隊員八十二名の合計九十六名の戦死者を出した。ほかに転属者五名があったが、比島からの生還者は三名に過ぎなかった。

海上挺進基地第七大隊は、磯部軍治少佐を大隊長として、暁第一六七九四部隊と称し、昭和十九年八月三十一日に宇品の船舶本廠で編成を終った。

中隊長には第一中隊長村中中尉、第二中隊長小笠原大尉、第三中隊長川崎中尉、整備中隊長小野田敏夫大尉等で、軍医として守屋正中尉があった。

大隊は春祥丸、帝風丸、白鹿丸に分乗して九月十日門司を出港し、主力は十月五日マニラに着き、約一ヶ月半同地で隊の整備を行っていたが、十一月下旬より大隊の主力は東部のマウバン地区バライバライ河岸に移動し、その河岸に大隊の宿営基地と舟艇の秘匿基地を設定した。

しかし十二月下旬には大隊は沖田支隊に編入されることとなり二十年の一月六日に至り、小野田中尉の指揮する整備中隊（約三十名、一コ小隊は基地隊主力と同行）のみを同地に止め、主力は振武集団に属しマニラ東方地区防衛に転用されることとなって、マウバンを出発し、マビタックに移った。その後ラグナ湖北部のマスキットロックに移動し、同地に主力を置いてバラス、マスキットロック、ハラハラ半島（ラグナ湖に突出している地域）地区の警備に当たった。

次いで三月五日、更にマスキットロックを出発してパンタイを経てカヌマイ山四〇〇高地（別名赤城山と呼んだ）に転進し、ここで約二ケ月間戦闘を行ないながら、糧秣確保や陣地の確保などに努めた。

六月一日、更にカヌマイ山から再びマスキットロックに転じ、同陣地で斬り込みや食糧確保に努めながら敗戦を迎えた。

マウバンに残った整備中隊は、戦隊がマウバンを去った後、進入してきた米軍・ゲリラ等と交戦しながら全員無事にサランバト附近の木暮支隊本部に合流して行動を共にし、大部分が生還した。

これらの転進、また移動の戦闘の結果、

大隊の損害は総員九四八名中、八九一名が戦死した。

## 敵中横断山中彷徨

元海上挺進基地第七戦隊
軍医大尉　守屋　正

私の属する海上挺進基地第七大隊は比島東海岸マウバン地区バライバライ河岸において、第七戦隊の舟艇秘匿陣地の設営（秘匿壕の作成、宿営設備の建設等）や舟艇の整備、等の軍務についていたが、基地大隊は振武集団傘下に入り、マニラ東方方面の沖田支隊に編入されるため、昭和二十年一月八日マウバンを出発した。その後ラグナ湖北部山中で戦闘を行いながら、陣地の確保、糧秣の確保に努めていた。

### 井上伍長との邂逅

八月も終り頃のある日、剣山陣地の通信班のバハイ（日本語の〝家〟）にいる兵が、「軍医殿、若い兵が一人やって来ました」といって、ヒョロヒョロの若い兵士を私のバハイに連れて来た。

その兵士に、「お前は何処の部隊か」ときくと、「私は海上挺進第七戦隊の井上伍長です。ラグナ湖を四月のはじめに横断して、敵の中に斬込んで、私一人だけ助かって、それから歩きまわってここまで来ました」という。

これには全く驚いた。今年の一月に。バライ陣地で、戦隊と別れて、それからあの戦隊員たちはどうしているだろうかと、いつも気にかかっていただけに、あの戦隊員たちが殆んど戦死したことを、この井上伍長からきかされて暗然とした。

「お前はよく助かったものだ。大切な命だから大事にしなければならない。これから四キロ半ほど離れたところに、私たちの部隊長がいるから、そこまで案内させよう。くれぐれも身体に気をつけるのだよ」といって、通信の兵にたのんで部隊長のバハイまで案内させた。

彼は部隊長の所に行き、そこで自活していたらしいが、果して山を無事下りたかどうかも知らなかった。しかし唯一人の生き残りの井上伍長が無事に日本へ帰っておればよいがといつも気にかかっていた。

戦後、私はその井上伍長の住所氏名を知り、彼からも詳細な資料を書き送って貰い、また直接会って話をきいた。

（事務局　守屋軍医の書籍には第七戦隊の移動前後を含め、詳細な記述があるが、ここでは省略して、第七戦隊第三中隊の四隻がアンゴノ東南の湖岸に無事に上陸したが、敵に発見されて攻撃され、隊員の殆どが戦死し、井上伍長が一人生き残ったところから記述をはじめる。）

### 生き残った井上伍長

突然！川下の方でどやどやと多人数の足音が乱れて聞こえ、米兵に指揮されたゲリラの一隊が機銃を持って現れ、隊員達の五十米程手前の地点に散開し始めた。

その直後、新たに川上の方にも多数の足音が聞こえ、配置につくらしい異常な物音が響いて来た。

ほんの数米離れたやや高い位置の叢に歩哨を命ぜられていた井上伍長の眼にドラム缶を横にして、液体を川へ流し込んでいる敵兵の姿が叢越に見えた。

“挟まれた！”

そう思ったのとガソリンの臭気が立ちこめ始めたのが同時だった。次の瞬間

「グァーンッ！」

と言う爆発音と同時にバーッと川面が燃え上がり、炎は見る間に川岸の枯れ草に燃え広がり、潜伏中の隊員めがけて一気に押し寄せてきた。

この爆発音を合図に川下の機銃の一斉射撃が開始され、その騒音の中で隊員は一斉に立ち上がったが、嶋少尉の号令が激しく隊員の耳を打った。

この時Ｉ伍長が肩を射抜かれて何事かを叫びながら叢の中へ倒れ込んだ。

咄嗟に周囲を判断した井上伍長は
「中隊長こっちだ！」
と叫びながら一気に敵の砲兵陣地へ向かって駈け上り始めたが、嶋少尉他全員は井上伍長とは別方向の上流の炎に向かって喚声を上げて駆け出していた。

空白の刻が流れた。井上伍長が我にかえった時周囲は既に夕闇に包まれていた。
「ああ、俺は生きている…」
そう思った途端
「戦友は！？？？」
と反射的に周囲を見回して居た。
彼は竹藪の中に伏せて居た。顔がヒリヒリと痛むので手を当ててみるとどうやら顔中傷だらけらしかったが、出血はたいした事はないようだった。顔の外にも躯のあちこちが痛んだ。思考力が回復して来るにつれそれはこの藪に飛び込んだ時この地特有の竹の棘の故とわかってきた。然し敵弾が当たっている様子は無かった。
既に静かな周囲を確かめてから竹藪の中から這い出てきた井上伍長の位置は丘の中腹であった。ゆっくりと暗い斜面を下り小川の辺りに立って見回してみたが、ガソリン特有の臭気がまだたちこめて居るばかりで、一帯の焼け跡には戦友の遺体らしいものは全く見当たらなかった。
駆け出す寸前に目撃したＩ隊員の倒れた地点付近にも彼の遺体を見出す事は出来なかった。
マビタック出撃以来思ってもみなかった結果に井上伍長は只呆然と為す術を知らず、振り仰ぐ夜空に今夜も降るような南国の星が瞬きやがて胸の痛みと共に滲んでいった。

## 井上の彷徨

やがて敵の攻撃も止んだが、日が暮れるのを待った。やがて音楽が聞え出した。もう敵の攻撃はないので安心して川岸に行ってみたが、戦友の姿はなく、死体も見付からなかった。小川で顔を洗った。顔がひりひりする。夢中で土を掘って、顔を土に伏せてじっとしていた時に傷ができたのである。彼はこの時自分が一人だけ生き残ったのだとわかり、淋しくて、なさけないという気持で涙がポロポロ出た。
彼は、何とかして敵中を突破して、友軍の陣地に辿りつこうと決心した。しかし五十メートル四方ぐらいの所に歩哨線があり、ピアノ線が張ってあって、それに引掛るとガラガラ音がして、機関銃が射撃され、他へ行くと犬が吠えて出られない。敵もまさか、内から外へ出ようと苦労している日本兵がいるとは思わないから、幸い発見されなかった。「自分はどっちへ行ったらよいか、どうか神さま教えてください」とその時は手を合せて祈った。そして木片を倒してみて、その倒れた方向へ行こうと考えたりもした。
こうして敵中に三日三晩過ごした。夜になると冷えて少し寒いが、それより蚊が裸を襲撃してくるのに閉口したそうである。彼は砲撃の音によって、日本軍の位置と距離を計算することに三日目に気がつき、発射音から爆発音までを指を折って、何秒か数えて、その方向へ脱出しようと決め、三日目の深夜にうまく歩哨線を突破して敵中脱出に成功した。
ここから敵中彷徨がはじまった。敵中なので、昼間の行動は一切できない。朝と晩の敵の攻撃のない時に、敵から遠ざかるようにしたが、はじめの内は一日三百メートルから五百メートルしか動けないこともあった。
彼には勿論方向はわからなかったし、日本軍の配置など全く知らなかった。今、地図でみると、敵の砲兵陣地から北北東の方向の山地を歩いていたらしい。数日して、水量が多く、急流で、深く、十五メートルから二十メートルの巾のある川

に出た。対岸に渡り、疲労と寒さと飢えで眠くなり、ここでぐっすり眠った。それまでは途中赤い木の実があったので、それやタニシを生で食べて飢えをしのいだ。　水だけで数日間生きて来た日もあるのだから、大した生命力に驚くの他はない。

**山中の彷徨（1）日本兵と出会う**

ふと見ると、一人の日本兵が向うの山を匍うようにして下りてくる。行ってみると、大腿部から切断して片足がなく、傷口には蛆がわいていた。きくと、五訓山の斬込に行き、負傷して自分だけ陣地へ引き上げたのだという。東京出身の召集兵であった。そして、彼はこの附近に自分たちの部隊の陣地があり、そこにはたくさんの食糧があることを教えてくれた。

五訓山とはマリキナの東北約九キロぐらいのところにある山である。彼の案内で谷川の崖に掘った糧秣庫に行った。中には、味噌、醤油、乾燥野菜、乾めんぽう（乾パン）、白米がうんとあった。将校行李も数個残されていた。靴も靴下もあった。将校飯盒で銀飯を炊き、乾蓮根に舌鼓を打って、一躍立派な皇軍兵士になることができた。靴下には白米を一杯つめた。

この負傷兵とそこで共同生活をした。ある日、生野菜が食べたいという話が出て、大豆を河原に蒔いたら、翌日芽を出して、もやしがとれるからと、一升ほどの大豆を河原の水辺に蒔いた。これが命とりになったのである。ゲリラのパトロールがこの即席栽培を発見して、日本兵がこの附近にいると判断して、米比軍が残敵掃蕩に数日後突然やって来た。

負傷の日本兵は捕えられ、何かペラペラ訊問されたのを、離れたところから見た彼は咄嗟に危ないと判断して身をかくした。翌日帰って見たらその負傷兵は焼かれて白骨になっていた。火焔放射器でやられたのであろう。糧秣庫の洞窟は爆破されていた。ここは危険なので、彼はまた一人ぽっちの当てもない彷徨をはじめなければならなかった。

**山中の彷徨（2）兵站病院**

彼は、「私は日本軍の陣地へ辿りついて、戦隊の斬込の模様を上司に報告する義務があると、それを目的として生きつづけて来ました」と言った。

私（守屋）はこの言葉に思わず唸った。「こんな偉い日本兵があの頃のフィリピンにいたのか」と驚嘆した。理窟は抜きにして、立派である。十九歳の井上のこの純真な軍人精神に、私は輝くような美しいものを見出した。この勇気、沈着、忠節を高く評価すべきだと思う。そこには軍国主義のカテゴリーを飛び越えて、人間としての偉さ、最高の奉仕精神を強く感じる。純粋のものは永久に美しい。彼はこの心一つに支えられて、これから五ヵ月近くも、生死の境を彷徨するのであるが、それは決して逃避行でも、戦線離脱でもなく、模範的日本軍人としての行動として賞讃すべきものである。

私は彼から、ふしぎな話をきいていたことを書くのを忘れていた。

それは、敵中にいる翌晩から、彼の身体の周囲を十数個の火の玉が飛びまわったというのである。この話を彼からきいたある人は蛍だろうといったが、蛍ではなく、柿の実ぐらいの大きさでにぶく光る赤色の円い玉たったそうで、どこからともなく現われて、二十メートルほど飛んでは消える。十数個が代る代る飛びまわった。

そばを通る時はしゅっとかひゅっとかすかな音をたて、顔にぶつかりかかるとぱっと明るくなり、頬が熱くなったそうだ。この火の玉は彼の後で発生して前の方へ飛んだそうで、二日ぐらいは恐ろしくて、火の玉が見え出すと、眼を手でかくして見ないようにしたが、しまいには

むしろなつかしくなったと言っていた。

この火の玉は彼にしか見えなかったので、もし誰にでも見えていたら、彼が敵に発見されていたに違いないと言っている。とにかく今もこの現象はふしぎでならないが、その数は丁度戦死した戦友と同じぐらいの数なので、やはりそこに一つの因果関係があるのではないか。それに自分にしか見えないので多分に精神的のものも考えられると話してくれた。

火の玉は彼の一番苦しい時、すなわち斬込失敗の翌日から一週間か十日ぐらい毎夜つづき、安全地帯に出たら出なくなり、その後は一度も見えなかったそうである。やはり戦友の人霊（ひとだま）が自分を守ってくれたのだと考えているとつけ加えた。

井上は幸運にも片足の日本兵に遇い、その兵に食糧庫を教えられ、その兵の犠牲により危うく難をまぬかれた。ふしぎなことである。彼は食糧を背負って一人でまた当てもなく山の中を歩きだした。とにかく日本軍の陣地をさがして、谷川に沿って何日も歩いた。これも早朝と夕刻になって日が暮れるまでの僅かの時間しか行動できないので、その一日の行程は僅かなものであった。

何日歩いたか覚えがないが、ふと人声がする。耳をすますと日本語である。日本兵の姿が見えた。近寄ると病気で弱つた曹長であった。そしてすぐ近くに大きな洞窟の兵站病院があることを教えてくれた。

その兵站病院は、谷川から二十メートルばかり上の山の斜面に、間口五メートル、高さ五メートルぐらいのトンネル型に掘って物凄く大きな洞窟病院で、中央が通路で、両側に患者がずらりと並んで寝ていた。これだけの大きな洞窟は余程の労力と時間がないと掘れない。どこの兵站病院であろうか。私は一月下旬にアンチポロの兵站病院へ患者を連れて行った時、もうこの病院は閉鎖して、近々北の山の中へ移動すると衛生兵が言っていたが、或いはその病院かも知れない。

患者は二、三十名いた。井上の姿を見ると、この二、三十名は一斉に喜ぶような、泣くような一種異様の声を挙げて、やがてみんなおいおい泣き出した。その泣き声が洞窟に響いて凄壮なものだったそうだ。どの患者も重症で、歩けるものはいない。いずれも死の一歩手前のものばかりであった。

洞窟の入口には死体が折り重なって倒れており、さらに谷川の方へも死体は投げ込まれたように棄てられている。その臭気は堪えられないものがあったに違いないが、井上は臭いという意識もせず、唯茫然と彼らを見守っただけであったといっていた。

患者たちはひとしきり泣き、その話すことをきくと、兵站病院がさらに北へ移動した際、動けない足手まといの重症者はそのままここへのこして、「必ず助けに来るから」とだまして彼らを放置したのである。残ったものは匍って、下の谷川へ水を飲みに行って露命をつないでいた。

井上が突然元気な姿を現わしたので、彼らは、自分たちを約束通り迎えに来たものと錯覚して、声をそろえて一同うれし泣きに泣いたのであった。

井上はこんな所に長居するわけにはいかない。自分には上司への報告の義務があるのでさらに奥地へ行かねばならないと思ったが、あまり可哀そうなので二、三日彼らを介抱してやったそうである。日本軍の残した食料をとって来たり、水など汲んで来てやった。彼らが井上に話すことは、自分たちの家族のことばかりで、自分の故郷はどこで、子供が何人いるということをみんな彼に話したがったそうだ。この気持は私には痛いほどよくわかるが、「一ツ軍人ハ忠節ヲ尽スヲ本

分トスベシ」で鍛え込まれた彼にはうるさくて仕方がなかったと話していた。

その二、三日いる間にも次から次へと死んだそうである。

ある日ガヤガヤという妙な声が聞えだので、彼は咄嗟に岩陰にかくれた。そっとみると、二十名ばかりの米軍が残敵掃討にやって来たことがわかった。彼らは洞窟病院を発見して入口から銃撃し、入口を爆薬で破壊して、全員を生き埋めにした。井上はあやうく虎口を脱れて逃げることができた。こうして彼は再び一人ぼっちになった。

## 山中の彷徨（3）米軍の食糧を確保

川岸の日本軍の糧秣庫でとって来た食糧も次第に減って来た。とにかく食糧の確保が急務であった。彼は再び川沿いに上流へ歩いた。約二十日間朝と夕刻の行軍が続いた。

道の方向は、路傍の人糞をみて人間がいることを知って決めた。路傍には生きた日本兵が一人二人点々といたが、殆んどが病兵で動けない落伍者であった。海軍の兵士もいた。

一人てくてく歩いていると、ひょっこり川岸に米軍がいるのを発見した。いつの間にか米軍の後から歩いていたのである。よく見ると、山の稜線に米軍の陣地がある。もう食糧がなくなったので、米軍の陣地へ行くと食糧があるだろうと思って、山の稜線へ上ってみたところ、幸い米軍の陣地の跡へ出た。みると、レーション（携帯食料）やチョコレートやドロップの罐などがどっさりそのまま棄ててある。米軍は補給がいくらでもあるので、移動の時はそのまま残して行くのである。ここでしっかり腹拵えをした。

レーションの缶詰の開け方がわからず、銃剣でこじあけて食べたが、その内、罐の底についている金具で、ぐるぐるまわして開けることを覚えたそうである。

米軍は稜線づたいに移動して、日本軍を奥地に攻め込んでいるので、陣地跡が点々とのこり、そこは井上の食糧採取場であった。カービン銃と銃弾も陣地跡で拾った。銃弾はいくらでもあった。この武装がその後たいへん役に立つのである。

この豊富な食糧は飛行機から落下傘で陣地に投下することも知った。この落下傘は色分けで内容がわかるのであるが、はじめはそれがわからず、米軍は木にひっかかった落下傘は邪魔くさがってとらないので、苦労して取って開けてみたら、迫撃砲の砲弾だったりしてガッカリしたそうである。その内、赤色は武器、青色は食糧か水であることがわかった。また山地を歩くのは谷底を歩くと方角がわからなくなり、米軍のように稜線を歩かないといけないこともわかった。

はじめの内は、レーションを百二、三十個も持っていたが、重いので、ビスケットのようなものだけを米軍の鉄兜の中でつぶし、粉にして、水を入れるためのビニール製のような大きな袋につめて、それを背負って歩いた。食事はこの粉を水に溶いて食べるのである。こうして、この少年ロビンソンクルーソーは次第に生活の智恵がつき、栄養もよくなって、少し肥り出したそうである。

彼の行動は朝、夕一時間づつぐらいなので移動の距離は極めて短い。マリキナ前方の砲兵陣地に斬込に行って、一ヵ月ぐらいは覚えていたが、それ以後は何日経つたか、今日がいつかも全然わからなくなってしまった。

明けても暮れても、米軍の攻撃から判断して、日本軍の方へ少しでも近づきたいと念願した。敵中へ唯一人のこされた孤独感というものは、栄養が少しよくなりかけて猛然と湧いて来たそうである。

この時、彼は最初大声でハッハッハッハッと高笑いして、次に大声で泣きわめき、それから気持をごまかすために、知っ

ているだけの歌を片っ端から歌ったそうである。話相手もなく、一人ぼっちの自分は気が狂うのではないだろうかと思ったと言っていた。この現象は医学的にはたいへん貴重である。このような人体実験はしようにもできない。

彼は飢えがあるときは、こうした孤独感はなく、ただ生きたいという気持だけだったのが、いわゆる衣食が足って、栄養が正常になり、食による生命の危険がなくなった時、頭脳に次の慾望が湧いたのである。仲間が欲しくなった。

一人でいるのがやり切れなくなったのである。普通の人間だったら、この時発狂していたかも知れない。軍隊の訓練により得た強靭な精神力の持主であった彼でさえも、自分は気狂いになるのではないかと思ったと私に告げた。

米軍の陣地跡にはライフなどのグラフ誌が残っていた。英語は少ししかわからないが、ルーズベルトが死んで、その葬式の写真が載っていたり、日本軍の敗戦の模様などが載っていたそうだ。

ある時谷を通った時、無数の日本人の白骨死体が転がっているのを見た。中に子供の死体があり、ランドセルを負い、絵本がそばに散らかっていたのが可哀そうで忘れられないと言っていた。これはマニラから一般在留邦人が東の方へと逃げていた時に、機銃掃射を受けて全滅した哀れな姿であった。非戦闘員の死体ぐらい胸をえぐるような痛ましい気持になるものはない。合掌するのみである。この谷には女の衣類もたくさん散乱して棄てられていたそうである。

谷へ下りると死にかけた日本兵にときどき会った。彼らに話しかけると、きまって故郷のこと、妻子のことをくどくどと言った。落伍して、既に魂が故郷にかえっている病兵は、一言でも家族の話をして自らを慰めたいのだが、この井上にはこれは全然通じなかった。一途に斬込の模様を上司に報告するまでは死ねないと考えていたので、落伍兵の泣き言は全て聞き流し、しまいにはうるさくなり、もう話しかけないことにしたと言っていた。こんな男は死ぬる時はテンノーヘイカバンザイと言ったかも知れない。

彼はレーションを粉にして、袋につめて、それを六俵以上背中に負って、半年分の食糧は確保したと思って、日本軍を砲爆撃の音をたよりに根気よくさがし歩いた。

どうやら三ヵ月以上経ったらしい。山はますます嶮しくなり、しばしば絶壁にぶつかって、後退したこともあった。大分深山に迷い込んだらしく、夜になると鹿の鋭い啼き声がさかんにきこえた。この鹿の声ははらわたをえぐるような感じで、何とも言えぬ気持の悪いものだったそうだ。それは人里遠く離れて深い山に迷い込んでしまった証拠のようなものであり、キーンという耳をつんざく声をきくのはたいへんおそろしいものであった。鹿はすばしこくて、五十メートルも近寄れなかったそうである。

も一つおそろしかったのは無数の山びるだった。北部ルソンにいた人からよくきいた上からパラパラ落ちるのでなく、鉛筆ぐらいの細い山びるが湿気の強い夜はぞろぞろと身体中へ匍い寄って来て、頭といわず、ズボンの中といわず、すき間から潜り込むので、横になって寝ることもできなかった。この無数の山びるが木の枝を移動する時は、雨でも降っているのかというようなジャーという音がして気持が悪かったそうだ。

もうこのあたりは米軍は進出していない。米軍はあるところまで日本兵を押し込んだら、食糧攻めで自滅を待っているので、こんな深山には用はないのである。米軍の陣地の中を通っている時、ばったり米兵に会ったこともあったが、機敏な彼はいつも素早く逃げたそうだ。

## 山中の彷徨（4）第三十一連隊の兵

その頃から砲撃の音も少なくなり、上空を飛ぶ敵機もめっきり減って来た。ところがある日、谷川で数人の日本兵にぱったり会った。弘前第三十一連隊の兵士であった。この時ぐらいうれしいことはなかったそうだ。何ヵ月間の労苦がやっと報いられて、友軍の陣地に辿りついたのだ。この数人の兵は食糧さがしに部隊から出ていたので、その中にそれから後この井上を親身になって世話をしてくれる伊藤曹長もいた。

その他に軍医中尉と軍医見習士官もいた。見習士官の方は少し弱っているようだった。この弘前第三十一連隊は戦記によると、私たちのいた四百高地の北方五、六キロの悠久山、光明原という峻嶮な山に布陣していたことになっている。五、六キロといえば僅かの距離のようだが、原始林の複雑な地形で、しかも道もない嶮しいところが多く、実際に歩くと何日もかかる行程である。井上はこの山より更に奥地まで迷い込んで、行く手が全て絶壁のところに来たので、引き返して、この悠久山の方へ出たものらしく、ここで食糧探しの第三十一連隊の将兵に出遇ったのである。

その大隊は一ヵ月ほど前、米軍と激戦を交え、大隊長は少佐で実に勇敢な典型的な武人で、最後に敵が総攻撃をかけた時は、軍刀を引き抜いて、敵弾雨飛の中に仁王立ちとなり、「行けっ、行けっ」と部下を叱咤して、弾丸を全身に浴びて、仁王立ちのまま戦死し、ぱったり倒れたそうである。その時は一人の兵長も立つたまま銃を腰だめで打ち、一歩も引かず、大隊長と同様壮烈な戦死を遂げたので、その二人の遺体はその戦死した位置にそのままに置かれ。既に白骨化していたという。何故埋葬しなかったのであろうか、理由はわからない。部隊の生き残りのものは約三十名いたが、この二人をなお生ける人の如く尊敬していたため、戦死した姿のままにしておいたのかも知れない。伊藤曹長はこの話を井上にして、あれが大隊長、こちらが兵長の遺体だと教えてくれたという。これも戦場心理の特異な一つであろう。

井上は友軍に遇ったうれしさのあまり、半年分の自分の食糧の六俵のレーションをこの三十名に全部提供してしまったのである。「私は日本軍の実状を戦隊以外はよく知らなかったので、これで自分も助かったと安心して、持っていたレーションをみんな出してしまったのです。おそろしい弱肉強食が行われていることなど夢にも考えませんでした」と説明した。

いかにも天真爛漫な彼らしい行為である。普通の兵だったら、こんな気前のよいことは絶対にしない。必ず自分用に必要なだけをかくすものである。一同はこの思い掛けぬ珍味に大喜びで、三十名もいるので、六表のレーションは一週間で食べてしまった。

この一週間の間に、たいへんな珍事が起きた。彼の言う弱肉強食の実例である。

ある日、部隊に一緒にいた親日のフィリピンの大学生の通訳が、「キャプテン　パタイ　パタイ」と泣きながら駈けもどって来た。パタイとは死体のタガログ語である。キャプテンとは彼を可愛がっていた憲兵曹長のことである。

伊藤曹長と井上は早速通訳と一緒に現場に行ったところ、軍属のような男が憲兵曹長を拳銃で殺し、裸にして、肉を切りとるところであった。

すぐ捕えて、訊問すると、憲兵曹長が米軍のレーションを持っていたので、これを奪うために射殺し、さらに肉まで切りとるつもりであったことを白状した。航空廠の軍属であった。

伊藤曹長は烈火のように怒って、「元気な日本の軍人を射殺し、更に肉を食うとは何事だ、お前はそれでも日本人か、生かしておけぬ」と言ったかと思うと、井上のカービン銃をとって、バリバリと彼を射殺した。

通訳のフィリピン人は主人がいなくなって悲しむので、「君のよいようにしなさい」と言ったところ、「私は日本軍に協力したので、家へ帰ると殺されるかも知れない。しかしそれでもよいから、親や兄弟のいるところへ帰ります」と言って一人で去ったそうである。

伊藤曹長は現役で、頭の緻密な親切な人間で、谷川でぱったり会った時から、ふしぎに井上と気が合った。彼は井上に、「このままここに居ると、食糧がなくなって、いずれはみんな倒れてしまう。元気な間に、他の人には気の毒だが、脱出しよう」と言った。

井上はここで上司に報告できると思ったのが当てがはずれて、困っていた時なので、早速もう一人脱走希望の東軍曹と三人で、ある夜こっそりこの死の山地から脱出した。

今度は三人なので力強かったが、食糧が何もないので、それをさがすのに難儀をした。この陣地から東のインファンタの方へ行けば、戦隊の本部があるし、そのあたりの地理は井上がよく知っているので、とにかく東の方へ行くことになった。

三人は途中で小さな椰子のような木の芽や酸っぱい青いみかんのような木の実や、ざくろに似た果物、椿の葉などを食べながら、大きな山を越えた。この山はどうも剣山の北の武勲山のも一つ北の山らしい。食べものが悪いためか、代わる代わる熱発した。マラリアである。今まで何カ月も一人で歩いた時は病気しなかったのに、三人になったら病気が出た。気のゆるみからかも知れない。病気をするとお互に気合いをかけて元気づけることにした。気合いを入れられるとふしぎに元気が出て、また歩けるようになった。

この大きな山を越えて、原野に出た時、野牛の群に会った。水牛ではない。小さい黒い野牛で、四、五十頭群をなしていた。これも敏捷でとれないそうだ。殊に傷ついた野牛は人間におそいかかるので危険だと伊藤曹長が教えてくれた。

ある時伊藤曹長が、剣山の麓に第七大隊がいることを途中で遇った他の部隊の兵からきいた。剣山は特徴のある形をしている山なのですぐわかった。三人は剣山の東側に出て、タナイ川に沿って南下した。このあたりに来ると、ところどころに。パパイアなどを見付けた、日本の兵隊にも次第に沢山会うようになった。

このあたりでカービン銃が役に立った。食糧探しをする時、あらかじめカービン銃を連射すると、あたりの日本兵はゲリラと思ってみんな逃げ出すので、ゆっくり食糧が採れたそうである。

彼は伊藤曹長らと脱出してから一ヵ月ぐらいして、剣山の森へ着いた。

## 山中の彷徨（5）第七戦隊基地大隊にて

こうして井上に私が会い、部隊長のバハイに案内させたのであるが、その時伊藤曹長らも居たという記憶はない。井上の印象があまりにも鮮烈だったので。他の二人に気が付かなかったのであろう。

井上ら三人は部隊長に会った。この時部隊長は、伊藤曹長と東軍曹に、「第七戦隊員をここまで誘導してくれた労苦には感謝するが、ここは第七基地大隊なので、井上は自分の部下として収容するが、お前たち二人はわれわれと一緒に暮らさすわけにはいかないから、勝手に自活してくれ」と言った。

井上は、命の大恩人の伊藤曹長と別れたくなかった。また三人でどこかへ行こうかと思ったが、部隊長の命令に服従し

ないわけにはいかなかった。この時は部隊長の冷たい仕打ちを恨めしく思ったそうだ。

こうして井上の不倒不屈の五ヵ月に近い山中彷徨は終った。彼は部隊長のバハイで暮らしているうちに間もなく終戦となって基地大隊と共に山をおりた。

**終わりに**

私は、この長い話を昭和五十二年四月十一日に井上君から直接私の家できいたのである。その前夜は、現在奈良にいる七戦隊の大谷君が京都の井上の宿に来て、朝の五時まで徹夜で語り明かしている。奇しくも戦友達の三十三回忌に当る頃であった。井上の長女が京都の高等助産婦学校に入学したので、その入学式に列席のため、遥々日本の南の果てから大旅行して来たのであるが、入学式へは娘があまりお父さんが田舎者で恥ずかしいと言ったので、列席せずに、正午すぎに私の宅を訪ねて、午後十時まで、夕食の間も話をきいた。その夜は私の家へ泊めて、翌日は朝から京都見物に案内しようと楽しみにしていたところ、朝、蒲団はきちんとたたまれて、井上の姿は見えず、も抜けの殻だった。門も閉っていたので塀を乗り越えて外へ出たらしい。数日して「暁の脱走」を詫びた手紙が来た。ここにも無慾で純真な彼の姿があった。

**第七戦隊員の大谷君の話**

**北部戦線にて**

この井上と全く同じような実例がも一つある。それは第七戦隊の数名が病気で台湾へ残留した。この内の大谷久夫君という特幹伍長はパラチフスを発病し、他の四名は菌保有者だが至って元気であった。台湾の部隊に転属になった特幹もいるが、林田弘君という特幹は大谷君と相談し、どうしてもフィリピンに渡って、本隊に合流することを考えた。これが昭和二十年一月のことである。一月の上旬には富永航空司令は「わが任務終了す」といって、多くの部下を棄ててフィリピンから台湾へ逃げて来ている。林田君のフィリピン行の工作は大谷君が一月四、五日目頃に屏東陸軍病院を退院して、まだ足がフラフラしている頃からはじめられた。

そして、一伍長の林田少年兵は、どこをどうして口説いたのか、フィリピン行の貨物輸送機へ便乗する許可を得た。この出発は昭和二十年一月十六日であるから、驚く他はない。その時台湾からフィリピンへ飛んだ便乗者は田畑参謀と林田、大谷両伍長の三人であった。ここにも少年兵の火のような義務感がある。正に特攻精神である。輸送機に乗る時に、整備兵が、「親玉が逃げて来ているのに、お前たちは何んで行くのか」とあきれ顔できいたそうだ。

当時、一般下士官が飛行機でフィリピンに赴任追及するなんて、異例中の異例のことで整備兵があきれるのも無理はない。

飛行機は北部ルソンのエチャゲに無事到着し、その後二人は参謀以下の本部要員からマスコットのように可愛がれた。そして北部ルソンの各地で転戦して、後に戦車撃滅隊に所属し、バレテ峠の激戦にも参加し、その後も苦労を重ねて終戦を再びエチャゲで迎えている。渡比工作に努力した林田君は不幸にも北部ルソンのアリタオで戦死したそうである。しかし彼の戦死公報はラグナ湖の北のマリキナとなっているそうで、全くでたらめである。第七戦隊員の特異なケースとしてここに記述しておくが、「一死報国」に燃えた純情な少年が、こうした苦難の後に永遠に消え去ったことは戦史は何も語っていない。

# 連載山ある記８　山梨県「茅ヶ岳」

会員　池田　康博

「日本百名山」の著者と言えば深田久弥、その深田久弥の「終焉の地」で有名な茅ケ岳（標高千七百四ｍ）を目指した。中央自動車道の韮崎ＩＣで降りて右折し、韮崎昇仙峡ラインを20分ほど走ると深田記念公園の駐車場に着く。ここが茅ヶ岳登山の始点である。

８時42分、駐車場を出発、しばらく行くと右が茅ケ岳、左が深田記念公園の分岐がある。ここを右へ曲がって幅の広い、緩やかに登っている谷筋の登山道を歩く。徐々に登りはきつくなるが１時間程で「女岩」に着いた。ここは「女岩」と名付けられた巨岩が、まるで谷を塞ぐように居座っていて、その上は急傾斜の樹林帯となっているところだ。ここを迂回するように登って女岩の上に出、それからジグザグの登山道を滑らないよう注意深く登って行く。10時23分、やっと鞍部に出た。ここからは頂上まで露岩の細い尾根道になっている。５分ほど登ると、道の傍らに「深田久弥先生終焉の地」と刻まれた小さな石碑があった。ここで倒れたのかと、しばし感慨に浸った後、再び尾根道を両手も使いながら20分ほど登ると頂上に出た。10時44分であった。山頂は岩がゴロゴロしているものの平坦な円形をしている。大きな木はなく、南アルプスや八ヶ岳、奥秩父の山々が見渡せるはずであったが、生憎、ガスがかかっていて見えなかった。

茅ケ岳山頂

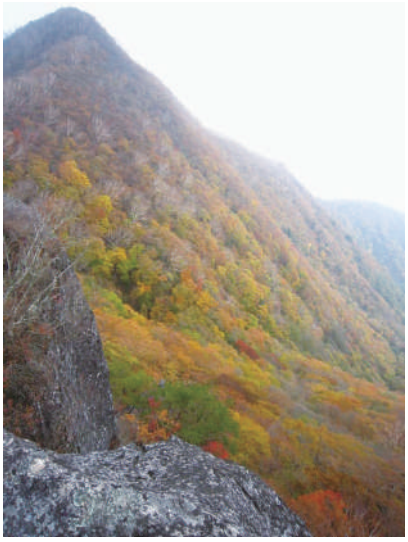
昼食にはまだ早いので、少し先の方へ足を延ばして、茅ヶ岳と連なっている金ヶ岳の「石門」まで行ってみることにした。

金ケ岳の「石門」

山頂から急傾斜の登山道を百ｍほど下り、いよいよ金ヶ岳への登りが始まるという所に「石門」はあった。

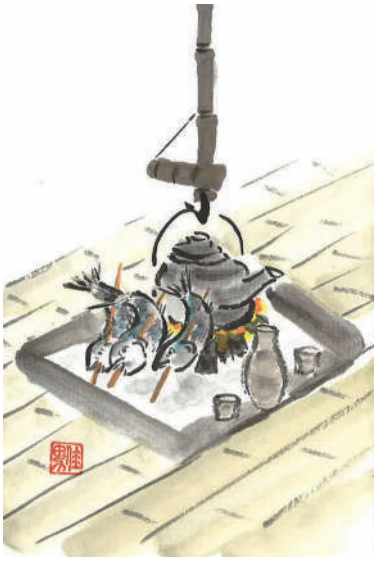
それはまさに金ヶ岳への「門」となっていて、筑波山の「弁慶の七戻り」や妙義山の第四石門を想起させる奇観であった。そして、紅葉が真っ盛りの周辺の景色をたっぷり楽しんだ後引き返した。

再び茅ヶ岳の山頂に着いたのは11時56分。ゆっくり昼食を摂って、12時36分、下山にかかる。帰りは尾根筋のコースをとった。やはり急峻な下りではあったが、途中からは防火帯となっている登山道をひたすら下り、最後に深田公園でゆっくり休んで、駐車場に着いたのは14時10分であった。


石門の上から見た茅ケ岳と紅葉

# 特攻文芸

## 短歌・俳句・川柳の部



●咲け桜　飛び征く君に　見えるよに
淳

●青空に　季節外れの赤とんぼ
征きしあなたの　面影偲ぶ
淳子

●涼風に　秋桜（コスモス）揺れて　秋深し
よみびとしらず

●秋茄子を嫁に食わせる母の夢

●黄絨毯ぎんなん踏むな九段坂
井下駄マスオ

## 事務局からの報告等

### 一　特攻顕彰会の会計年度

当顕彰会の会計年度は一月一日から十二月三十一日となっています。令和二年度の会費については、来年の会報二月号に同封します「払込取扱票」により送金して頂きますようお願い致します。

### 二　年会費及び寄付金の税額控除

当顕彰会は公益財団法人として認定されていますので、年会費も税制上は「寄付金」として取扱われます。このため、この年会費を確定申告する事により税額控除を受けることが出来ます。

確定申告に必要な「寄付金受領証と税額控除に係る証明書㊞」が必要な方は遠慮なく事務局へご連絡下さい。

なお、一万円以上の御寄付をされた方にはご連絡の有無に関係なく送付させて頂きます。また、税額控除についてご不明の方は事務局にご連絡下さい。

### 寄付者御芳名（敬称略）

（令和元年年7月1日～9月30日）

（単位千円）

一〇〇　呉　菜々子
一〇　斎須　重一
一〇　田辺さだ子
一〇　久保　巍
一〇　齋須　将
一〇　名和まどか
八　田代　勉
七　服部　武志
七　新垣　元武
七　菅原　春生
七　加藤　拓
七　橋本大二郎
七　浮世　喜昭
七　作左部　貢
七　上野むつ子
六　小坂　宜雄
五　伴野　富夫
五　堂坂　清
五　福田　文治
五　中熊　真一
四　新井　重雄
四　澤田　壽朗
四　吉田　文尭
三　日高　誠
一二　降矢　達男
一〇　古屋　七郎
一〇　原　照寿
一〇　天野　弘子
一〇　粕井　隆
一〇　酒井　陽太
七　阿部　敏行
七　臼田　智子
七　早田　亮彦
七　小堀圭一郎
七　鮫島美知子
七　氏家　康宇
七　島袋　幸雅
七　根本　紘一
六　近藤　敬子
五　高橋　芳幸
五　後藤　昭一
五　竹田　五郎
五　原田里津子
四　野俣　明
四　植田　和男
四　和才　誠
四　紺野　真理
三　國武　統士
三　濱田　秀逸
三　佐藤　義信
三　林　佐吉
三　秋田　省一
三　古閑カツ子
三　西村　征夫
三　青山智由貴
三　藤本　英憲
二　山口　高治
二　川田久四郎
二　鍋谷　欣市
二　今井　敏
二　後藤　英夫
二　水町　博勝
二　衣笠　陽雄
二　河島　慶明
二　中島　尚史
二　安藤佐智子
二　大澤　和久
二　寺井　俊一
二　安井　松男
二　石本登志夫
二　松尾　知男
二　石井　敏子
二　川床　剛士
二　中本ゆかり
二　太田　秀雄
三　吉野　信二
三　下森　康玄
三　森山　敏明
三　安田　和義
三　杉山　徹宗
三　宮尾　敏晴
三　安永真理子
二　早瀬　登
二　吉田　治正
二　小川昭二郎
二　清水　典郎
二　柴　芳文
二　岩崎　昭男
二　小倉　利之
二　大瀧　成紀
二　坂本　康子
二　松田　栄
二　正本　禎亮
二　早川　文象
二　江副保次郎
二　髙田　透
二　小島　啓三
二　田崎　鉄男
二　中村　実
二　大岡　知
二　小川　弘子
二　梶原　武

二羽渕　徹也　一加藤　千佳　神奈川　菅沼ひかる
一佐多　和仁　一青木　義博　本川　祐治
一渡辺　由佳　一渡辺　里佳　石井　真之
一藤野　洋政　一古川　淳一　長岡　暢俊
一吉村　伊平　一神崎　夢現　天野　文恵
一豊嶋　勝　一村山　公一　宇都宮秀全
一間山　聡　一山田　元　江成　雅子　新潟　星野　元

## 新入会員名簿（敬称略）

（令和元年年7月1日～9月30日）

秋田　藤井　明　京都　加藤　尚登
栃木　岡安　秀和　寺澤　要子
埼玉　山畑　雅浩　高倉　弘喜
小山　哲　小川　泰俊
岡谷　貢　廣川　恭子　大阪
山口　修司　安岡　賢治
山口有加里　石飛　清隆
千葉　石原　薫　米原冨士雄
村川　豊　永富　康修
東京　田中雄一郎　久世　高義
高田　吉章　波部　修三　兵庫
橋本　昌幸　花輪　悦子
登坂　裕行　奈良　和田　祐子
本原　和哉　和歌山　松下　敬次
吉田　日光　島根　道前　利行
山近　義幸　広島　中嶋　裕子
野村　知史　福岡　小出　洋
佐賀　三宅　雅幸
長崎　鹿子島　孝
鹿児島　喜久　忠人

## 会員訃報（敬称略）

岩手　一戸　孝七（30・10・27）
千葉　奈良部光孝（1・3）
田中　賢一（1・7・2）
木原　滋之（1・7・28）
片岡　重子
東京　桜庭　正基（29・12・20）
久保　雅史
神奈川　冨川　逸郎（30・6・1）
長野　上村　貞蔵（30・12）
小林　清完
大阪　瀧　省一（30・8・14）
徳島　稲木　義明

## 会報『特攻』第１２６号正誤表

次のとおり誤りがありましたので、謹んで訂正し、お詫び申し上げます。

（訂正箇所）

49頁表題の筆者名

誤　会員　中川法宏

正　会員　青木和子

## 会員ご入会のご案内

「特攻隊戦没者に感謝と敬意を」

当顕彰会は、先の大戦の末期、一つしかない命を、祖国の安泰と家族や大切な人のために捧げられた特攻隊員に対し「あなた達のことは忘れません。有難うございます。感謝します。私たちも努力します。どうぞ安らかに！」を胸に、慰霊・顕彰を行う団体です。これにご賛同して頂ける方ならどなたでも会員にお迎えいたします。多くの皆様のご入会をお待ちしております。

○当顕彰会の主な事業

・特攻隊戦没者の慰霊顕彰（他団体への参加を含む）

・会報の発行等による特攻及び戦没者の伝承等

・特攻に関する資料の収集、調査、図書等の貸出講演会等の開催その他

○年会費

・一般会員　３０００円

・学生会員　１０００円

○ URL:http://www.tokkotai.or.jp

ＱＲコード

## ご投稿についてのお願い

ご投稿に際しては、次の点にご留意くださるようお願い致します。

1　原稿は、手書き、ワープロ、パソコン作成のいずれでも結構です。可能ならば、ワードファイル、又はテキストファイルで頂ければ幸いです。ＰＤＦファイルは編集の都合上、お受けできません。

2　記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当顕彰会にお任せ願います。

3　投稿記事に関する写真がありましたら、なるべく添付して下さい。

4　原稿、写真等は、原則としてお返し致しませんが、必要な場合はその旨お書き添え下さい。

5　会報・機関紙、投稿記事等の送付先は左記宛てとして下さい。

〒１０２-００７２
東京都千代田区飯田橋一丁目５－８
東専堂ビル２階
公益財団法人　特攻隊戦没者慰霊顕彰会
電　話０３-５２１３-４５９４
ＦＡＸ０３-５２１３-４５９６
E-mail　tokuseniken@tokkotai.or.jp